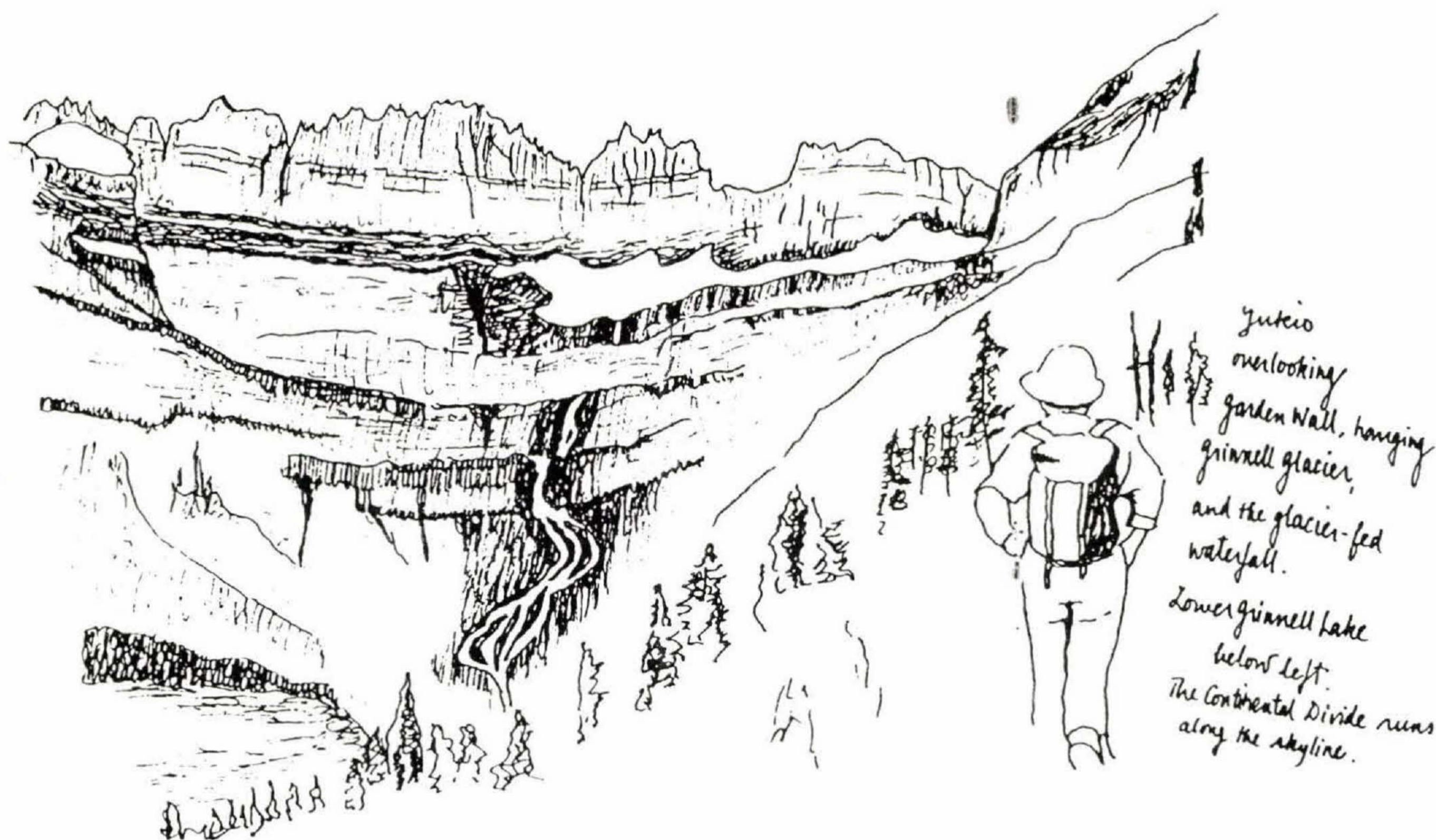


# 針葉樹会報

第92号  
2000年11月



## 目次

表紙スケッチII米国の氷河公園グリネル氷河／加地幸雄	追悼	増山さん	堀岡 清
編集後記	増山さんと柿原さん	増山さん	山本健一郎
会務報告	開戦直前の月見の宴	開戦直前の月見の宴	小林 茂雄
磯野・望月文庫 見学会	針葉樹会と二人のおじ	針葉樹会と二人のおじ	宮川 守久
凍傷で入院して	カトマンズ便り	カトマンズ便り	横山 皖一
天山山脈・中央アジアへ	マッターホルン スキー行	マッターホルン スキー行	奥野 巖根
米国大陸分水嶺の縦走／序章	ツール・ド・シルクロード(自転車)	ツール・ド・シルクロード(自転車)	春日井 実
蓼科に住む(アダージオ開業記)	天山山脈・中央アジアへ	天山山脈・中央アジアへ	加地 幸雄
松尾 信孝	米国大陸分水嶺の縦走／序章	米国大陸分水嶺の縦走／序章	加地 幸雄
田形 祐樹	蓼科に住む(アダージオ開業記)	蓼科に住む(アダージオ開業記)	松尾 信孝
山本健一郎	凍傷で入院して	凍傷で入院して	田形 祐樹
29	磯野・望月文庫 見学会	磯野・望月文庫 見学会	山本健一郎
27	編集後記	編集後記	32
24	会務報告	会務報告	30
15			
10			
9			
8			
6			
5			
3			
2			

発行日 2000年11月30日	<b>針葉樹会報</b> 第92号	編集人 佐藤 恭
発行者 針葉樹会		〒240-0066
印刷所 ヤマノ印刷(株)		横浜市保土ヶ谷区釜台町5-4-806 会報幹事 佐藤 恭、井草長雄、大谷公重

## 追悼—増山清太郎氏(昭8)

増山さん

堀岡 清(昭10)

増山さんが亡くなった。山歩きを一緒にした先輩はこれで丸茂さん一人になった。

私は予科二年の夏の上高地からの部員だったので、当時、増山さんは国立、我々は石神井ということで毎日顔合せの出来たのは私共も国立へ行くことになった昭和七年からである。増山さん、同期の太田ドンちゃん、清水さん等にはよく山へ連れて行って貰った。

最近のことは知らないが当時の山岳部にはリーダー制度などはなく、一緒に山歩きしても実力のある人が自然にリーダーシップを取る様になり、それで色々教えが受けられることになり、これが部風だと思った。

針葉樹会の例会に出席する様になって吉沢クマさんはじめ諸先輩の話聞く様になって矢張りそうだと確認出来た様な気がした。



増山さんは冷静沈着というか大きな声は出さず物静かで正確を尊ぶ人であると思った。我々がい、加減なことを言うところ「一寸待ってくださいよ」と微笑みの様な顔で静かな調子の声がかかる。そして正確な答えが出て来る。今でもその顔、その声が思い浮んで来る。また同期に同姓同名が居り、掲示板には増山清太郎AとかBとかと出るのが珍しいことだったのでこれも思い出される。

増山さんとは数多くの山歩きがあるが、私が小樽だということ十勝岳へ一緒したのが特に思い出される。

昭和八年三月、当時札幌在勤だった奥野大先輩と二人で十勝岳へ登った。これが東京へ伝わり針葉樹会例会上で十勝岳へという話になったのだと思う。

一行は先輩奥野綱重、手塚晴雄、増山清太郎、学生十合健二、宮川雄二郎、それに私と

いうメンバーである。

この時は非常に寒かった。酒も凍るし、コッペパンを折ると中から氷片が出て来る。「焼きミカンの生ミカン」という話もこの時のことである。凍ってカチカチのミカンを食べるのに鉄板ストープの上で焼き、皮が黒く焦げると中身が生ミカンになるという意味である。

旭川へ降りて来てからこの日の温度を見ると、零下三十度か三十一度だったので山ではそれ以上だったろう。昭和八年十二月末から正月にかけてのことであり、新設の勝岳荘という三階建ての大きな小屋に泊まったのだがこの時ほど寒かったのは私も初めてのことであった。流石の増山さんも驚いていた。

リュックの中の写真機には勿論懐炉を抱かせていたが外へ取り出すとレンズが曇るので拭く必要があるのを知ったのもこの時のことである。

柿原君の追悼号となった会報九一号が来て間もなく、増山さんから「困った事になってしまった」に始まる葉書がひよっこり届いた。

永らくお互いに御無沙汰だったのにこの追悼号で私の名前を思い出されて葉書の送り先の一つに私も選ばれたのではないかと直感した。

この葉書を貰った会員も多いと思うが、「私は食いしんぼうだから云々」など増山さんらしい所もあるが、読んだ瞬間、私には増

山さんらしくないと感じられた。七十年近い歳月が物の考え方を変えたのだろうか。私は何と返事を出さうかと数日考えて居たが読んで直後に思った所をその俣書き送らうと次の様な意味のことを書いた。

「私は膝、腰、肩が昔の様でないので山歩きは大分前からやめて居る。それで会報には専ら追悼文要員になつて居る。又追悼文を書かされるのは困るので是非早く元通り元氣になつて私に追悼文を書かせることのない様にして下さい」と。

増山さんはこれをどう読まれたか、久しくお会いしてない私には判断出来ないが、ずーつと気に掛かつていた。ところが石原君から訃報であり、追っかけて佐藤君から恐れていた追悼文の依頼である。

私は今、名簿をながめていて若し私の追悼文を書いて呉れるとしたら誰だらうと考えた。私は自分そうはならない積りで居るが、私の追悼文を書いて呉れ相な会員諸氏へ御願申し上げる。十二分に健康に留意されて御元氣で御消光される様に。

困った事になつてしまつた。いわゆる枕もあがらないとゆう状態で十日ばかり日赤に再入院している。身体の不調に氣がついたのは昨年中でパーキンソン病のようだった。入院したのは三月八日。精密検査中に大腸に閉塞をおこしている事がわかつて一時パーキンソン病はおいといで、急きよ手術してそれは成功して。其の後色々な誤診。誤解があつて今後は長期戦後は○? ×? の方向がきまるだろう。御見舞は遠慮。其の理由。精神的に見舞客の応対するのは非常に苦痛。金銭的に難病である事はわかつていたので必要な準備は出来ている。品物の面で私は食いしんぼうだから枕元に置きたくない。諸君との昼間の楽しい付き合いを思い出している。

増山さんと柿原さん

山本 健一郎 (昭32)

相次いでお二人の先輩があゝの世に旅立たれてしまった。増山さんは、学生だった私が最初に会費を頂きにあがった頃は協和銀行(現あさひ銀行) 渋谷支店長をしておられたような記憶がある。

ところが私が三井信託の入社試験を受けた時、筆記試験会場はお隣の協和銀行日本橋支店の3階か4階にある「虎の間」という会議室で、もともとここは協和と合併した銀行の本店だったとかで、虎にちなんだいろいろなコレクションが飾られた部屋だった。そしてなんと増山さんがここの支店長をしておられた。

その頃から今日まで増山さんの印象は一貫して変わらない。

昭和10年5月の針葉樹会報に「過日の針葉樹会席上で興味ある話題の一に、針葉樹会の出来たのは何年何月だったかといふ問題がでた。創立者たる面々が商大入学当時の秀才ぶ

りを發揮出来ずにあれやこれやと記憶の糸を手繰ってゐた時、我然エンサイクロペヂスト増山清太郎くんに依つて間髪を入れない解決が与えられ、余りの正確さ、余りの敏活さに流石多言の会員諸君も呆然として不気味な沈黙に陥つてしまつたのであつた」と園山さんが書いておられるのをご紹介すれば十分であろう。

この時の増山さんの発言の内容が伝わっていないのは残念だが、幸い昭和13年の春に増山さんは「針葉樹会十年史稿」なる記事を3回にわたり連載しておられるので、どのような事話されたのか見当がつく。その内容はおよそ次のとおりである。

1 昭和2年秋に増山さんが入部された時、実質的な先輩は大正年代卒業の奥野綱重、中川孫一、昭2卒の松倉栄二の3名だったのでOBだけの集まりは無く、山岳部の集まりに3名を招いていた。

2 昭和3年になり、吉沢一郎・五十嵐数馬・村尾金二・松木謙三・渡辺九郎・矢作太郎・小栗吉雄の7氏が卒業、OBがふえたので、昭和3年4月29日に調布の多摩川の河原で野外懇親会を開いた（この時の様子を紙数の関係でご紹介できないのは残念である）。その

帰路の電車の中で、月1回如水会館で集まる事になったが、世話人吉沢さんの地方転勤と松木さんの入営で、この会は年末には途絶えてしまつた。

3 翌昭和4年になると浦松佐美太郎さんが帰朝され、6名の新卒業生（曾田莊太郎・近藤恒雄・高木英二・冠木啓藏・赤城鈴太郎・森竹五郎）が加わつたのを機会に復活第一回の例会が、6月21日如水会館で行われた。この時、集会室の入口に「針葉樹会」という札が掲げられていた。会も終わりに近くなり、吉沢一郎さんから、「この会に針葉樹会という名前を付けておいたがどうだろう」との発言があり、一同が至極良からうと応え、ここに針葉樹会の名称が決まり、毎月第3金曜に集まる事になった。

この他にも増山さんらしく、富士山の文献を集めているから協力してほしいとの呼び掛けが会報に載せられた後、5回に渉り「富士山文献解題」と題した力作を投稿しておられる。

しかし増山さんの投稿は、このようなものだけでは無く、津川から室谷川沿いに奥の集落に入り、御神樂に登ろうとして果たせなかつた記録も寄せておられ、単なるアーム

チエア・マウンティニアアではないのだと思わせるところは流石である。

ところで先号に柿原さんのことを書きそびれたが、正月には柿原さんから「昨夏は86才の誕生日を病院で過ごしました」とご自分で書かれた年賀状を頂いたので、お元氣になられたのかと思つていた矢先の訃報に耳を疑つた。

先年も毛勝三山に行った事をご報告したら、私が行つた時の記録を書いたはずだが、何処に載せたか忘れてしまつたところのご返事を頂き、日本山岳会の会報に柿原さんご自身が書かれた記録と、山田さん山行譜に倉知君が載せた報告のコピーを送つて差し上げたし、高妻山に登つた報告には、あの山は大変で「這いきんぐ」のようだったところのご返事を頂いたり、折に触れて差し上げる手紙にはまめに「ご返事を頂いたものである」。

ところで柿原さんには山岳部時代、「神主」というあだ名があつた事は余り知られていない。名付け親は吉沢さんか近藤さん辺りで、ご出身地「三峰山神社の神主」からきたものらしい。

柿原さんのお通夜に伺つたら、ご遺志で神式で行われ三峰山神社の神主が現れたので、ふと柿原さんはご自分のあだ名を思い出し神

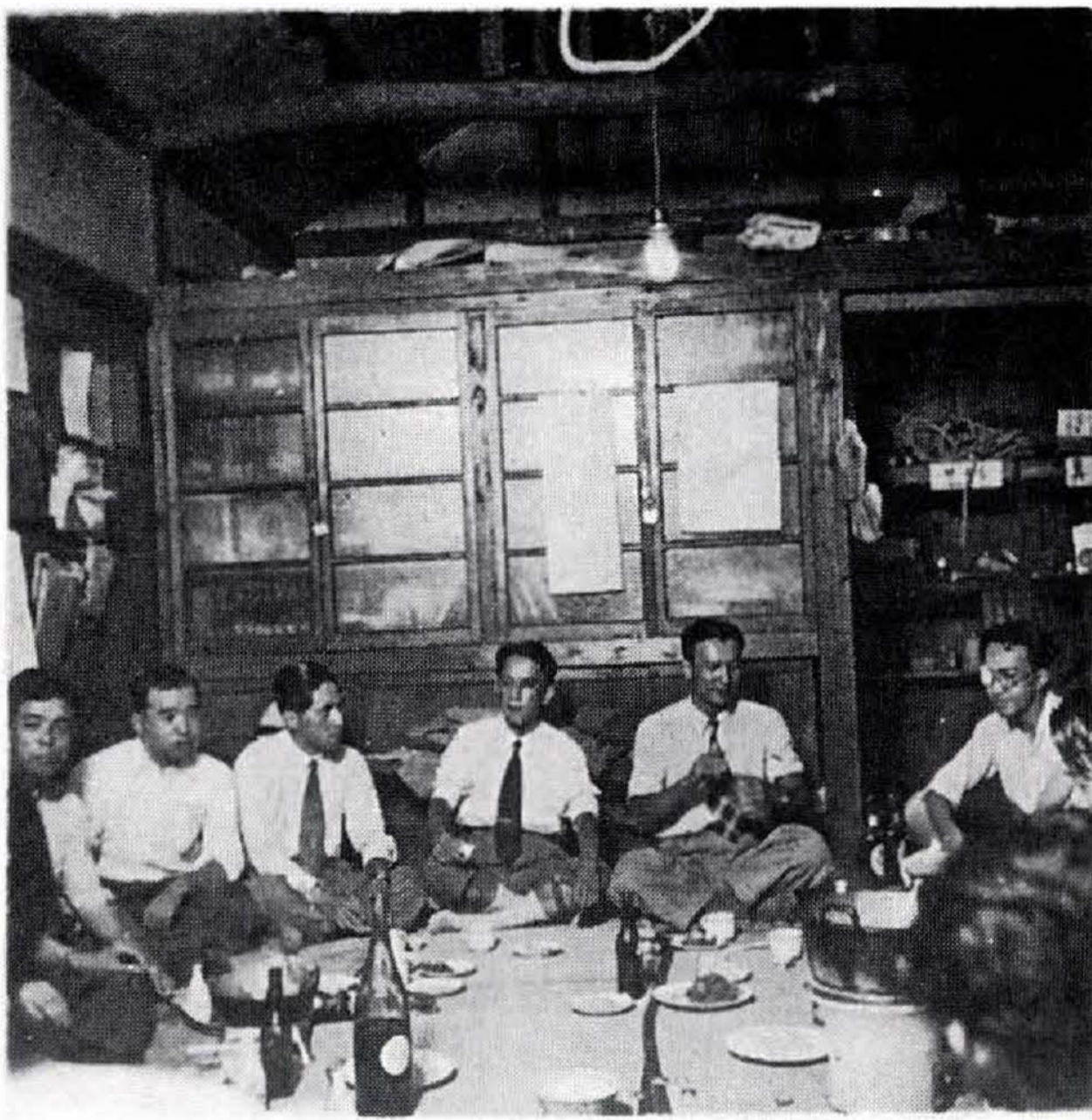
## 開戦直前の月見の宴

小林 茂雄（昭19）

この間、増山先輩のお通夜の時に話の出た昔の写真を拡大コピーしました。適当な大きさにして使用下さい。この写真は昭和十五年頃、月見の宴を旧部室内で催した時のものです。

上のほうは、右から高野秀男（昭19）小谷部全助（昭13）高見要（昭8）増山清太郎（昭8）一人とんで村尾金二（昭3）の各氏。

下の方は、右から小林重吉（昭13）常盤敏太先生（当時、山岳部長）堀岡清（昭10）岩



崎利一（昭15）一人とんで宮城恭一（昭16）の錚々たる顔ぶれであります。

コンロを持ち込んで、練炭か炭で煮炊きしていたので、危うく一酸化炭素にやられかけたこともありました。鍋の中身は得体の知れぬ物も多く、食器類は皿も小鉢もカップもすべてセトモノといった、昭和十五年当時の酒盛りの光景です。

壁にかかっているグリンデルワルトのポスターは、恐らく磯野計蔵先輩あたりが寄贈されたものではないかと推測していたのですが、当時は日本にあつては、これは夢のまた夢の世界にすぎず、文字通り「憧憬遠く……」と眺めていたものでした。



式にするよう言い残されたのかもしれないな  
どと思った。

通夜の後、すぐそばにいた人の顔に何やら  
見覚えがある。よくよく見ると雲取小屋の新  
井信太郎さんだった。髭を剃り鉢巻きもなく、  
ダークスーツに黒いネクタイでは分かる筈が  
ない。

新井さんと外に出るととても寒く、柴崎君  
には中には入れず庭に立っていたので応えたと  
後で電話で聞いたが、見上げた秩父の星空は  
横浜とは比べものにならないくらい綺麗だっ  
た。毎日こんな星空を見上げていれば、柿原  
さんのような人間になれるのかしらと思った  
が、もう手遅れのようなのである。

### 増山さんのご葬儀

増山清太郎さん（昭8）は、8月12日（土）  
午後3時、肺炎でお亡くなりになりました。  
お通夜は、8月15日、告別式は8月16日、  
目黒区下目黒の五百羅漢寺で執り行なわれま  
した。喪主は、静（しずか）さん。針葉樹会から  
はお花をお贈りし、会員多数が参列いたしまし  
た。

## 針葉樹会と二人のおじ

宮川 守久(昭33)

今般の叔父増山清太郎の死去に際しましては、針葉樹会の皆様方から数々のご弔意を賜り、また小林茂雄先輩、石井左右平先輩、石原現会長はじめ諸先輩方におかれましては、お暑い最中をわざわざ通夜にご参列頂きまして、誠に有り難うございました。また、本誌面を拝借しまして、故人が生前に皆様方から賜りましたご厚誼に対しまして、心より御礼申し上げます。

実は、私には針葉樹会に、先輩としての「二人のおじ(母方)」が居ります。一人は、亡母の実兄である高見要伯父であり、もう一人が亡母の実妹の嫁ぎ先である増山清太郎叔父です。増山家には、子供が居なかったため、小さい頃から良く遊びに行き、可愛がって貰いました。

叔父は、学生時代は幸田成友先生のゼミで経済史を勉強し、本来は経済史学者を志したかった様ですが、幼い頃に父を亡くした母子

家庭であつたこと、同門の増田四郎先生が先に学校に残られたこと等から、結局研究者への道を断念して銀行に就職し、その後も専ら調査・審査畑で今でいうエコノミストの様な仕事をしておりました。  
小学校5年で旧制の府立一中(現日比谷高校)に入学、中学4年終了で東京商大予科に入学という飛び級組で「僕は大学以外は卒業式に出たことがない」というのが自慢でして、



左から 増山氏、望月達夫氏、氏名不詳

何時行つても机の上やその周辺は「山と経済の本」が文字通り山積している始末で、終生この物事をきちんと究めないと気の済まない学者的気質は変わりませんでした。

この叔父と山やスキーに一緒に行つたことは、不思議と一度も有りません。私の山岳部時代には、上野池之端の吉田テント店謹製ナインバー入りの特大キスリング、札幌門田製の大振りの業物ピッケル、天然アザラシの本物スキー・シール、コツヘルやアイゼンといった山の道具類を専ら借用(結局は無断拝領となりましたが)に行き、合宿の話をして古い山行の写真を見せて貰つたり、山岳関係や民俗学関係の書誌学に造詣が深かつた事からいろいろと山の古典の話の聞いたりしたものでした。

米寿を過ぎても医者知らずで元気だった叔父が、昨年秋辺りから何となく歩行の足元が心許なくなり、今春身体の不調を訴え病院に行つたところがパーキンソン氏病とリンパ腫の疑いで即入院・手術となりました。その後、一旦は退院して卒寿を迎えたものの、6月には再入院となり、8月12日不帰の人となりました。

その間、7月には「困つた事になつてしまふた」で始まり、見舞いは一切無用とした上で、「諸君との昼間の楽しい付き合いを思い



1933年の卒業アルバムより。後列中央が増山氏

出している」との文面を叔母に口述筆記させ印刷した葉書を友人・知人や親戚一同に送らせたのも、あの叔父らしい「人生の締め括りとしてのけじめの付け方」だったのでしよう。亡くなる直前でも、荒く苦しい息づかいの中で「これ以上の延命措置は無用」とか「万の場合の措置」を指示したり、朦朧とする意識の中でも腕時計を見ては時間的経過を判断しようとしたり、血圧を看護婦に確かめよ

うとしたり、長年連れ添った叔母に別れと感謝の言葉を残したりするなど、その強固な意志や信念と集中力の強さには頭の下がる思いがしました。

さて、もう一方の高見要伯父には、幼い頃から色々な場所に連れて行って貰いました。郊外散歩のお供で一橋の国立キャンパスも1、2回訪れたことがあり、図書館で自分の卒論を探したり、兼松講堂を見たり、そうして松林の中にある旧部室の山小屋の鍵を開けて中を見せてくれたのも、臆気ながら覚えています。戦後は、弁当代わりに蒸かしたサツマイモを持って、東京近傍の山に連れて行って貰いました。

こうしたことから、中学時代から既に私の将来の進学先は、自ずと一橋大学「山学部」に家の内外で決まって仕舞った様なものです。その一橋大学「山学部」にめでたく入学して、穂高での最初の新人夏山合宿に参加した時には、喜んだ伯父が夫婦でわざわざ涸沢のベース・キャンプを訪ねて来て、色々差し入れをして呉れたのも懐かしい思い出です。この伯父も、31年前に亡くなってしまいました。

以上、会報編集ご担当の佐藤先輩からのご下命により、私事を長々と書き連ねて失礼いたしました。

追記 針葉樹会員の望月敏治先輩（昭25）



年、場所不明。右端 増山氏、中央村尾氏

が、偶然にも増山叔父と同じマンションの隣に住んでおられることから、今回色々とお気遣い頂きまして有り難うございました。

## カトマンズ便り

横山 皖一 (昭27)

週一回の直行便で関空を日曜の午後1時発、同日午後6時半(時差3時間15分)に着くのです。途中上海で約1時間待ちでしたが、丁度よい足の運動です。

カトマンズ空港でのビザ取得は簡単で、関空カウンターで貰った用紙に写真を貼り、旅券と共に30ドル出せばよい(これはきっちり用意が必要で、お釣りをくれないこともあるらしい)。今は雨期で簡単でしたが、乾期の旅行シーズンの時は、早く行って並ぶことが必要でしょう。6ヶ月の長期滞在のため3キロ超(普通5キロはまけてくれるので実際は28キロ)の大荷物でしたが、通関も外国人には問題なく7時15分には出迎えの人に会うことができました。

雨期といってもほとんど夜に降り、2週間ぶりに昼間雨が降りました。当地は北緯27度30度あたりで、日本の奄美大島と同位置。しかし、カトマンズの高度は1200米(志賀

高原くらい)で、現在の温度は22度〜29度。日本の夏ほど湿度が高くないのでクーラーは不要、扇風機で十分で夜は毛布1枚で寝ています。1月の最低気温も2度くらいで雪は降らないそうです。

ネパールの面積は日本の約三分の一ですが、その70%は山岳地帯と14%はヒマラヤ高地で、一応農業国となっていますが実体は観光立国の国です。街中にお寺が沢山あり、熱心にお参りしていますが屋根形式のはヒンズー教、尖塔形式のは仏教のようです。

なお、ネパールの休日は日曜ではなく、土曜ですが一般の商店は半分くらいは店を開けています。学校を除き政府関係、銀行、郵便局は日曜も休んでいます。

現在カトマンズで一番の問題はゴミ。埋めるところがないので取りに来ないと言っており石灰が沢山撒かれていますが、悪臭が酷いのです。中心街の昔ながらの細い道(狭い処は4〜5米くらい)はほとんどが一方通行で、この所々にゴミの山で小さな商店が両側に並んでいます。

この商店が店を開ける9時前まで両側に露天商が地面に物を並べているところもあります。この間を人、自転車、力車、テンプー(自動三輪)、タクシーが通るのです。このゴミはやっと最近片づき始めました。

私が日本語を教える中学校はこの繁華街を通って旧王宮の処から右に降りていきます。ホテルから20分。この道は観光客が通る道です。私もその一人として客引きに纏わりつかれ弱っています。学校の帰り、木に彫刻した片手に乗るくらいの楽器を売りに来たので値段を聞いたところ、初めは千ルピーと言っていたのが、だんだん値段が下がり、最後に200ルピーまで下がったのは驚きました。今日は山に帰るので(彼らの常套文句)是非買ってと言っていました。彫りが良くないのでやめました。

現在の相場は1ルピー約1・6円で、一般の物価が安いから随分と割安感がします。もっとも生活費が安いからボランティアとして参加できるわけです。例えば25枚の現像焼付けで200ルピー、マンゴ1キロ(3〜4個)40ルピー、モンキーバナナ12本20ルピー、ライム(6〜7個)5ルピー、五目ネパールつゆそば75ルピー、公営バス30分乗って4ルピーなどなど。

夕方、かわいい顔の男の子が「今日は」と声を掛けてきました。5時頃になると「今晚は」と日本では挨拶すると教えました。すると、小さな友達としてくれと行って、何処までも付いてきます。いろいろの経験からこれはおかしいなと思って雑談をしながら歩いて



いると、とうとう本性を現しました。

「家の赤ん坊のミルク代がないので困っている。赤ん坊は死ぬかもしれない」と言うのです。服装もきちんとしていますし、他の国にもよくある外国人へのタカリですから「うそを言って、乞食になつては駄目だよ」と目をみて「さよなら、行きなさい」と言うところまで離れていきました。

現在の学校で、月、水、金に各2時間日本語を教えており、別の学校では火、木に教える予定です。ここはバス停まで10分、バス30分、終点から学校まで10分で、通勤に50分かかるのですが授業は10時始まりですから問題はなく、この時間ですと往復座れます。毎日随分歩くので健康にはよいと考えています。

滞在期間は約6ヶ月ですが、10月には祭りが続き政府関係は9日間の休みが続きます。私はこの期間にラッサまでの自動車旅行（6日間）を計画し、ラッサ滞を含め10日間を見込んでいます。途中五千米以上の峠を越えますが、昨年10月四川省のチベット高原で平均四千米を馬で10日間旅した経験があり、最高は4950米の峠越えでしたから高度問題は大丈夫と考えています。この体験はご報告しましょう。

（2000年7月 在カトマンズ）

## マッターホルン スキー行

奥野 巖根（昭31）

寄る年波で足腰が弱って居ります。七十才近いのですから仕方ありませんが。先日も修験道で名高い大山に行きましたが急峻で息があがる脚は痙攣するわで参りました。矢張り無理せずにケーブルカーを利用すべきでした。

さて、可成り昔、三島由紀夫の自決（日経新聞に相当するフランクフルト・アルゲマイネ紙に小説を連載して居た関係からドイツでは著名。十文字ハラキリは縦横どちらが先か等という質問を外人から受けました）、隼石で自衛隊機と全日空機が衝突、フランスのドゴール大統領の死去の頃、当時私はデュッセルドルフに単身赴任して居ました。

イースター休暇があるとの事で会社のテックスを叩いてチューリッヒのホテルを予約、ツエルマットのホテルは予約が取れず何とかなるだらうと思って出発。チューリッヒ空港からタクシーで着いたホテルが制服の門番が居る一流ホテルで例の如く汚い格好で

入って行ったらフロントが変な眼で見えて居ました。

翌日電車を乗り継いでツエルマットへ、処がイースター休暇でどこも満員、矢張り宿が取れない日本人の慶応の先生と逢い、ここの辺はドイツ語とイタリア語圏ですが彼は英語しか出来ず丁度自転車で通りかかった郵便配達夫に宿を探して欲しい旨私の片言のドイツ語で依頼、親切に二駅下ったペンションを見つけてくれました。

二人でフォンデュを食べて宿に戻ったら田舎村の小新聞の記者とカメラマンが待つて居ました。私のパスポートに生誕地札幌とあり、オリンピック開催予定地からこんな田舎に来るのは珍しいと記事にしたかったらしいのです。翌朝刊に写真入りでのつてましたがドイツ語の為内容不明。

ツエルマットの街から登山電車でマッターホルンの三角錐の根元辺りのゴルナグラート迄登り貸スキーで滑り始めました。途中立たたストックにスキーをもたせかけその上で上半身裸の美女達が日光浴をして居るのを眺め乍ら滑って行きましたが、私の数少ない経験からですがゲルマン系の女性の胸が一番固くて上を向いて居る様です。

しばらく滑って居ましたが何しろ初めてのコース、カンカン照りでギャップが見えず、

おまけに二米以上の長い、ベントの固いメタルスキーで跳ね飛ばされ転倒。眼鏡が割れて顔面血だらけ。今でもさうだと思いますがツェルトマットは自動車禁止、救急馬車に乗せられて診療所へ。今迄で一番思い出の残るスキー行でした。

## ツール・ド・シルクロード

(自転車で天山山脈・中央アジアへ)

春日井 実 (昭32)

きっかけは2年前の朝日新聞の記事だった。「ツール・ド・シルクロード 自転車紀行・地元と交流も」という見出しと写真入りで自転車でシルクロードに挑戦する市民グループ「地球と話す会」(国立市)が紹介されていた。これによると、西安からローマまでのシルクロード(1万5000km)を20年かけて自転車で走るこの遠征には、14才から71才の男女が延べ160人参加して、この年はクチャからカシュガルまでの800kmを走破する予定になっていた。

実は、私はそれに先立つ4、5年前のT組のクラス会での近況報告の際に、「リタイア後は、飛行機以外の乗り物ならなんでもよい、鉄道・バス・四輪駆動・駱駝・自分の足を駆使してシルクロードを走破してみたい」と夢を語った。公言することで自分を抜きさしならぬようにする意味もあった。

朝日の記事には更に「時速15、20kmのゆっくりしたスピードで走り1時間おきに休憩をとる。体調が悪ければ後からついて来るバスに乗り込むこともできる。それほど苛酷な旅でなく、暑さ慣れなどのトレーニングをしていれば、健康な人なら誰でも参加できる。日頃の生活とは全く違った世界です」という隊長の談話が載っていた。

自転車までは考えていなかったが、私はすぐに電話で入会を申し入れた。入会してもその年はまだ現役であったし、その翌年の天山山脈越えは私には到底無理と考えてパスした。ところが昨年の天山山脈越えは、大洪水のために道路が破壊され、結局中国側の一部とキルギス側の一部しか走れなかった。今年も今年度分のビシケク(キルギス)とタシケン(ウズベキスタン)間の前に、リベンジとして昨年果たせなかった天山山脈越えを加える計画となった。

迷った挙句、私は最後のチャンスと思いい



方に参加することにした。それから山中湖、丹沢、奥多摩、三宅島での合宿、7月に入つてからは連日暑い多摩川の土手を一日80、90km走るトレーニングをした。多摩川ではサイクリングロードではなく砂利道(ダート)や草原をわざわざ走ってみたりした。

★7月30日

リベンジ分があるので例年より5日早く出発。成田を10時20分に発ってソウル、北京経由でその日のうちに新疆ウイグル自治区の区都ウルムチに到着するから便利になったもの。といつてもホテルに入ったのは午前零時を少し過ぎていたが、北京との時差が3時間もあるのに中国全土が北京時間なので、まだ宵の口といった感じで、暑さのせいもあって寝られない人達で街は賑わっていた。

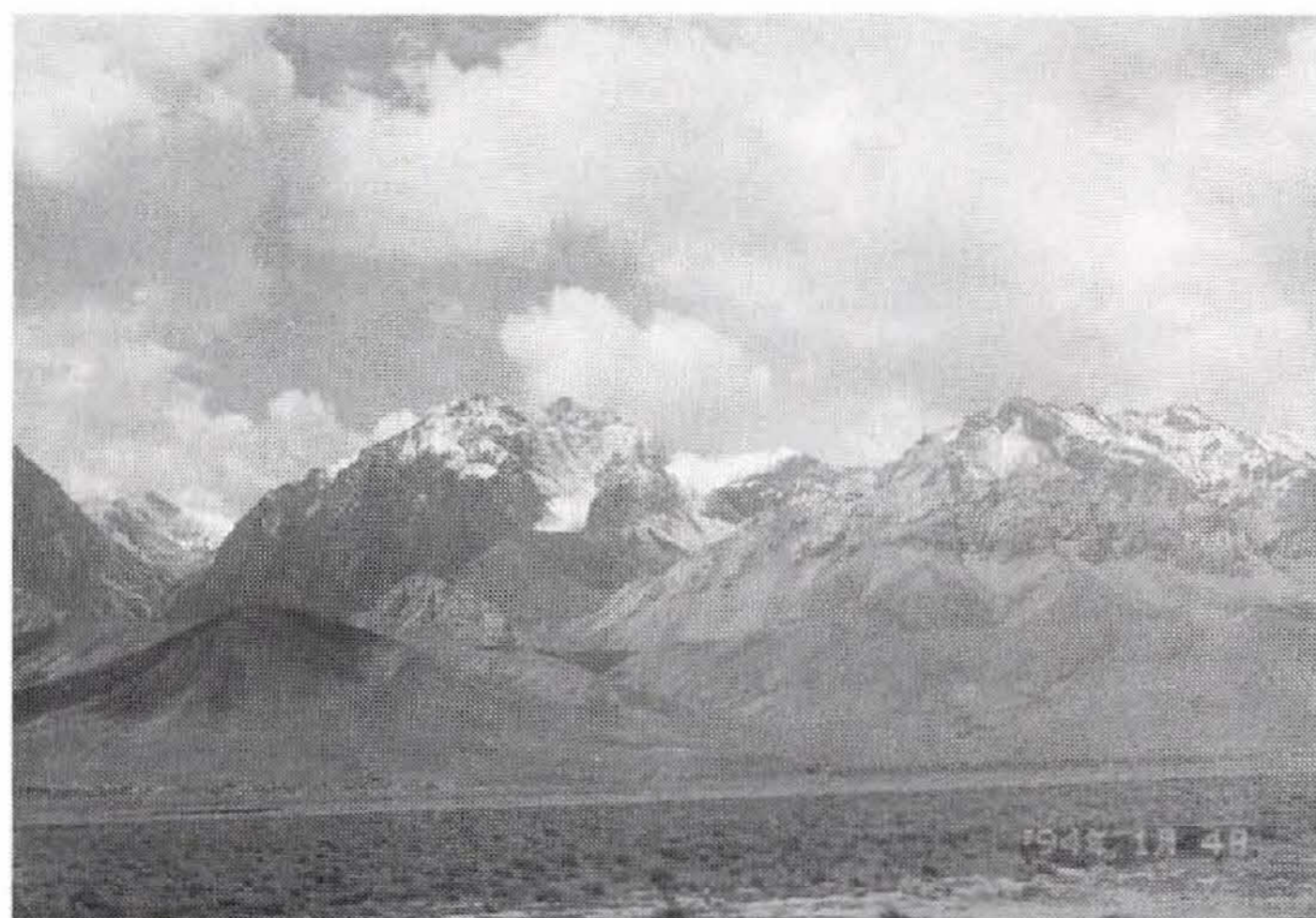
翌日はウルムチの博物館、バザール、市の中央にそびえる紅山公園に行った。ここからは石油採掘で最近急速に近代化したウルムチの市街が見渡せた。実際我々が泊まったホテルも今回の旅行中では一番よく、以後これ以上の施設のホテルにはお目にかかれなかった。

ご存じのようにシルクロードといつても一本の路でなく、複数の路がその時代々々の権力者や気象条件の都合で形成されていた。このウルムチからカザフスタンのアルマトイに至る路は草原を通るのでステップ・ロードと呼ばれ天山北路ともいう。天山山脈と崑崙山脈の間に日本の総面積に匹敵するタクラマカン砂漠があり、その山裾を通るのが西域北路（天山南路）と西域南路である。

我々が走るのは西安から天山南路のオアシス都市を結ぶオアシス・ロードを経て、中国

の最西の都市カシユガルから天山山脈を越えて中央アジアのステップ・ロードへ移るルートで、サマルカンド迄は玄奘三蔵法師の辿った路と天山山脈を越える部分を除き重なる。因みにインドへ行くならカシユガルから南下した方がずっと近いが、三蔵法師は当時の仏教を信ずる諸国の国王の庇護を得るために、遠回りをわざわざしたのである。

さて、その日の夜フライトでカシユガルに向かった。天山山脈を越えるので昼間であれば見える筈が残念だった。陳舜臣が旅をした20年前はプロペラ機では天山山脈を越えられず途中コルラ、アクス等に降り給油しながら



天山山脈の山なみ

らカシユガルへ到着したのだから、これまた便利になったもの。なお、今回の旅行ではここまで飛行機を4回乗り継いだ。天山山脈越えの高度障害を避けるためにキルギス迄は、アルコールと煙草は一切厳禁とした。

カシユガルに着いて最初のトラブル発生。8月1日は建軍記念日で越境できないという情報が入った。仕方なくカシユガルに足踏みしたおかげでエイティガール寺院とホージャ墳へ行くことができた。

ホージャ墳には香妃が葬られている。香妃は身体からかぐわしい香りが漂い、たぐいまれな美人だったのでそれを伝え聞いた清の乾隆帝が都へ連れて行ったが、求愛を最後まで受け入れずに自殺した。遺体は3年かけて運んで埋葬したという。

★8月2日

カシユガルをバスで発ち、昨年無念にも洪水のために引き返した入出国管理事務所（以下税関という）のあるトパに到着。

しかしここで第2のトラブル発生。税関は北京時間の10時にしか開かずそれも長距離トラックや定期バスを優先、我々の番が来たら2時の昼食休憩となり通関できたのは、6時間も待たされた午後4時になってしまった。

警備の軍人に前後を挟まれ出発。国境に近いため写真も駄目。40kmほど川沿いに走り、

標高差で400m登った辺りで、軍人が夕食に間に合わなくなるから引き返すと言いだしトパに戻る。トパと国境のトラガルト峠間には泊まれるような所はなく、戻るのは予定に入っていたが、距離が稼げなかった。

トパの招待所は7月30日から水が出ないといい、トイレも大分離れた屋外で穴があいているだけで不潔を絵に書いたよう。そういう訳で翌朝は気分良く野原で40年ぶりにキジをうって来た。

#### ★8月3日

今朝も税関と揉めた。トラガルト峠(標高3960m)とトパでは、標高差が1860mもあり高度障害の恐れがあるとか、今日はキルギス側からトラックが10台ばかり下りてきて危険だとか云ってなかなか走行の許可をしてくれない。自分たちで責任をとるといって一札を入れ、幾ばくかの謝礼を置いてやっと通行許可がおりたのは、午後1時。しかも5時に国境間近の検問所を閉めるので、それ迄にそこを通過せよとの条件つきだ。

昨日の地点から走り始めたが、標高差が1400mもある所を4時間で走るのは到底無理で時計と睨めっこしながら7kmだけ走りバスに乗るはめになり、自転車を押してでも自分の足で天山山脈のトラガルト峠を越えるという希望は絶たれてしまった。

国境で中国のサポート隊と別れ、キルギスから迎えに来たトラックに荷物を積み替えた。トラガルト峠には雪が残り、気温は5度C。時折小雪も舞ってとても寒い。

トラガルト峠からの下りの快走を楽しみにしていたが、前夜来の雨で道がぬかるみ凹凸もあつて危険なのでここはバスに乗つてくれとのキルギス側の要請に素直に従って、バスに乗る。途中まで行くと暗くなり、ヒョウまじりの雷雨となり結果的にはバスで止むを得なかったと思う。キルギスの第一夜はアドバシという所。シャワーはなくトイレも戸外で昨夜と同じよう。ただ夕食だけはサポート隊が作ってくれたので旨かった。

#### ★8月4日

昨夜はバスでここ迄来てしまったので、トラガルト峠方面へ30kmほど戻り走行開始(そこは国境から120km位の地点で、中国側に残した国境迄の62kmと合わせた182kmが未踏破で残されたことになり、再リベンジとなるか)。

この日は快晴でここからナリン迄は、右に白く雪をかぶった天山山脈の高峰(ナリン・トウ 4458m)が見え、左にも天山山脈の支脈であるキルギスキー・アラタウが雪をかぶって間近に見え、標高2500〜3000mの高原を快適に走った。

地球の凹凸を肌で感じるような登り下りもあつて、登りは確かに大変だったが今度のツアーで一番楽しい思い出に残るサイクリングとなった。最後の峠からは一気に下りとなり時速40kmでナリンの街へ着いた。ナリンは中ソが緊張状態にあった頃は、軍隊が駐留して賑わったらしいが、今は落ち着いた静かな街である。

#### ★8月5日

澄みきつた快晴の朝、ホテルから昨日越えてきた峠がくつきりと見えた。ここからピシケク迄は昨年走破済なので、バスで移動する。長く大きなドルン峠を越えた時、今年の苦労が偲ばれた。

幻のイシク・クル湖へ下る。つい数年前迄は外国人は一切立入りできなかった所だが、今は湖水浴の人で賑わっている。琵琶湖の8倍もあり深いので水量は世界一という。玄奘三蔵法師も天山山脈を越え、ここを通っているが、「荒波が泡立ち大波が果てしない」といつているのは風の強い季節だったようだ。北の湖畔には古代の都市が水没しているのをNHKのカメラマンが撮影している。

イシク・クルとは熱い湖という意味で冬でも凍結しないという。また移動してトクマク付近のブラナの塔を見学。突厥の戦士の墓といわれる石人が野原に無数に立っているのが



おもしろかった。

このあと玄奘三蔵法師が庇護を求めて立ち寄った碎葉城へ行くが、これがアクベシム遺跡で、ここまで足を伸ばす観光客はまずいない。実は遺跡は殆どが未発掘なので一見すると小山が幾つかあるだけで遺跡らしいものは一カ所しかない。

キルギスの首都ビシケクに着き、本年分だけ参加の隊員と合流。天山山脈も一応無事に越えたので解禁のビールで乾杯。翌日は休養も兼ね博物館・バザールの見学となった。

★8月7日

いよいよ今年度分のビシケク→タシケント

間の600kmの走行開始。

市の中央にあるマナスの像を3周してパトカーに先導されて、市街をあっという間に通過し広々とした郊外に出る。

左にキルギススキー・アラタウの主峰ピーク・セミヨーフ・ティエンシャンスキー(5105m)、カローラ山(5074m)が雪をかぶって見える。セミヨーフというのは天山山脈の初期のパイオニアで学術探検家である。

右側は見渡す限りの大草原が何処までも続く。時速は22〜23kmで平坦なところでは、30〜40分間に10分の休憩の繰り返し。4回目が西瓜タイムで、6〜7回目が昼食休憩となる。さて、パトカーだが片側2車線の対向車線走り、対向車を全部一時路肩に停止させてしまう。追越し車はパトカーの左側を抜いて行く(中央アジアは右側通行)。従って我々の自転車と車が接触する危険はまずない。車の往来も数えてみたら30秒に1台位だった。

★8月8日

今日はキルギスとカザフスタンの国境を越える日だ。この両国は統一経済圏を作っているので通関は簡単にすんだ。この日の走行も左に天山山脈、右に大草原で昨日と全く変わらない。

ここで我々が走行中にすることを書いてみ

よう。出発時には右手を前に高く挙げて「ジャキージャキー」と叫ぶ。公安から習ったもので呪文みたいなものらしい。

停止する時は先頭が右手を挙げ「減速」といい、斜め下におろして「停車」といつて止まる。走行中は「石」「落下物」「馬糞」「ガラス」「穴」「溝」「段差」等と叫んで後続に注意を促す。

このなかではガラスがパンクの原因となるのでいちばん怖い。それにここでは刺のある駱駝草が要注意だ。休憩時に路傍の駱駝草の上に自転車を横たえ刺の刺さったのに気づかず走りだすとパンクすることがある。2人がこれにやられた。駱駝はこれを平気で食べるというから矢張すごい。

★8月9日

一区間だけ雨に降られ、すごい砂埃に見舞われた。スキーのゴックルが役に立った。左の天山山脈が少し低くなり雪が見られなくなった。登り下りが結構ある。右側は相変わらずの大草原で時々少年が馬に乗って羊の群れを追っているのに遭遇した。

★8月10日

中国から中央アジアに入ってから食事が脂っこいものが多くなり、水分をどうしても取りすぎるので下痢を訴える者が目立つようになった。

私も昨日のビールの飲み過ぎで下痢症状で、朝食は目玉焼き1ヶだけにし、昼は紅茶4杯だけでこの日85kmを走り、下痢は絶食と夜の征露丸で強引に治した。タラズに到着。

★8月11日

タラズはシルクロードの要衝で歴史的に有名な所で、丸一日休養を兼ねて滞在することにした。12世紀にカラ・ハーン朝の首都として最盛期を迎えた。それに先立つ751年には、タラズ河畔で唐軍とサラセン軍の東西決戦があり、裏切り者がでた唐軍が負けてしまった。この時の唐軍の捕虜が西方に紙のすき方を伝えたのは有名な話。

アイシャ・ビビ廟も訪れた。戦いに敗れたカラ・ハーンが軍隊を訓練している時、商人の娘アイシャ・ビビが見ていた。二人は知り合い恋に落ち結婚を誓い合った。軍勢を整えたカラ・ハーンはアイシャを連れてタラズへ発とうとしたが、アイシャの父は反対し娘を家に閉じ込めた。娘に同情した母は乳母をつけてアイシャを密かにタラズに送った。

カラ・ハーンに会う前にタラズ河の川辺で身を清め花嫁衣装を着ようとしてペールをとつたら、その中に潜んでいた毒蛇に噛まれてしまった。急を聞いて駆けつけたカラ・ハーンは瀕死のアイシャを抱き上げて司祭に結婚式をあげて貰い、彼女以外に妻を持たないこ

とを誓った。彼女のために立派な廟を造ると同時に一生独身を通じたという。一夫多妻のイスラムでは珍しいことである。

ここでも民族のるつぽバザールへ行った。とにかく物価は安い。例えば大きな西瓜が35円、中瓶のビールが50円だ。雑貨も安い荷物になるので買うわけにはいかない。

★8月12日

今迄は西に向かって直線的に走って来たが、タラズを過ぎると道は南下する。もうここ迄来ると天山山脈も低い丘となってやがて大草原のなかに消えてしまう。その峠を越えるとシムケントだ。この日は最高の104km走った。

長い下り坂が急に10〜15センチ大の石ころ道となりスピードを落とし切れなかった女性隊員が転倒するアクシデントが起きた。顔面制動で擦過傷を負ったのでサポート隊が次の目的地へ連れて行った。

ここでサポート隊について触れておこう。パトカーに警官が2名。トラック1台。バス1台。それに昼食、泊まる所によっては夕食も作る賄い係が2名と車1台。それに通訳と旅行社の係員が1〜3名の大部隊が17名の隊員を支えてくれる。

3時頃着いたホテルの近くで鳴り物が聞こえて来たので行って見ると、17年前に亡く

なった村の長老の生誕百年祭だという。即興歌手の弾き語りがあったりしておもしろかったが、何といても言葉が思うように通じないのがもどかしい。

★8月13日

相変わらずの登り下りの繰り返し。道路は起伏に沿って直線的で迂回などない。その方がシルクロードの隊商達も歩きやすかったのだろう。シムケントは緑の多い綺麗な街。人なつつこい。

★8月14日

最後の大きな登りのある日。登りが何と20kmも続きこの間に200mの標高差があった。気温は連日36度Cを超えるので登りの時は汗が目に入って痛い。下りは緊張もあつて暑さを感じない。休憩の時は木陰、なければバスの陰に入ればなんとかなる。

この辺りには泊まる所がなく夏休みで生徒のいない学校の寄宿舎が宿泊所となった。近くに温泉があるというので行ってみたが、湯船などある訳なく、ただ熱い湯が蛇口から出るだけだった。それでも久し振りにシャワーを浴びて心地が良かった。

★8月15日

実は昨夜盗難事件が発生。用心棒として雇った兵隊が泥棒に変じたのだ。朝、通訳に被害を届け、上官と警察を呼び贓品は全部取

り戻した。

そのため出発が1時間遅れたが、いよいよ最終日。36km走ってウズベキスタンとの国境に到着。タリバーン（イスラム原理主義者）との紛争が2、3日前にあり、通関は手間どつた。

タシケント市に入る10km手前でいよいよこの隊の麗しい恒例に従いトップを最高齢者が務めることになった。当然私である。ジャッキージャッキーと叫び右手を高々と挙げて出発。市街に入ると市民が珍しいものを見るように足を止める。パトカーがサイレンを鳴らし、前方の信号が赤でも左右の車を停止させて進む。左折する時はパトカーが対向車線に止まり我々を安全に進めさせる。左手を挙げ左折の合図をしてスピード上げて曲がる。恰好のよい瞬間である。

15時30分ウズベキスタン・ホテルに到着。ホテル前の広場を3周して自転車を降りた。722kmの旅は終わった。ここ迄引張ってくれた隊員の一人々と握手して廻るうちに目頭が熱くなってきて、相手の顔が見られなくなつた。つらいことも多く走行中は来年のことは考えられなかったが、今はサマルカンド、ブハラに関する本を読んでいる。

## 米国大陸分水嶺の縦走／序章

加地 幸雄（昭33）

### （一）思い立ちと旅立ち

米国大陸分水嶺の縦走、文字通り途轍も無いこの考えを思い付いたのは何時の頃か。

1973年にJames R. Wolf氏がモンタナ州北半の分水嶺を走破。「Guide to the Continental Divide Trail, vol.1, Northern Montana」を著し、翌々年上梓。

一方、連邦政府は1968年に国定山岳路網法案 National Trail System Act を制定、十年後大陸分水嶺をその体系に加える計画を樹てた。政策上、全長2160マイルのアパラチア山系縦走路、2650マイルの太平洋沿岸山脈縦走路と3100マイルの大陸分水嶺縦走路、いずれも南北に走る長距離山道の三本立てが組織化された次第。

最古のアパラチア路は早くも1937年に、沿岸山脈路は1993年にいずれも貫通。大陸分水嶺の道は未完、現在全長の約8割が設置されている（もつとも「貫通」といつても

すべて新道ではなく、できるだけ既存の山道を連ねている）。

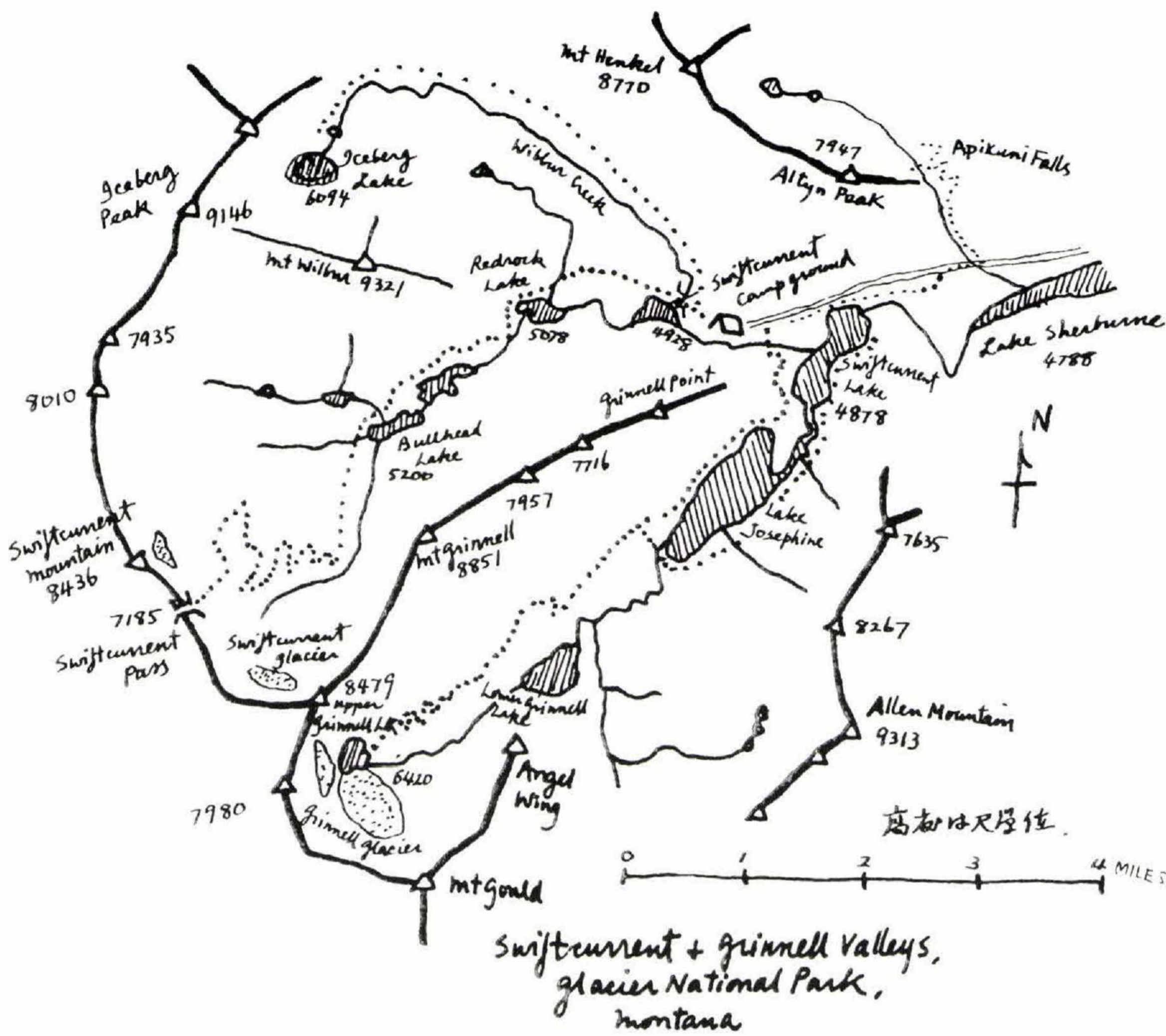
私はこの三路のうち、アパラチア山系に属するニューハンプシャー州のホワイト山群とニューヨーク州のアチロンダック山塊を1960年前後に散策していたが、三本立てを耳にしたのは1980年頃と思う。

以後、分水嶺の道祖神の招きにあうまで、少なくとも数年の年月が流れた。かえりみれば、1964年米国東部から大平原の中西部に移転後8年、山に飢えていた。1972年に折りあり、日帰り山行に恵まれたユタ州塩湖城 Salt Lake City へ引越し、毎週末の山行が3、4年続いた。しかし大学の授業や研究に専心するかたわら、次第に脚も山に向わず、運動は山より短時間ですむ走りになった。

また当時繙きはじめて中国の古典に惹かれ、哲学心も研究眼も西洋より東洋に焦点を合わせるようになった。そうこうしているうちに、走りが下火になり、山行の意が湧いて来た。「論語」と「老子」とともに、五十路の里帰りかもしれない。

昔、疎開先の北海道の一村、静内から白雪輝く日高山脈を遠望した時、山岳部時代、大糸線から朝日をあびる銀白の後立山を目撃した時、そして今日地図を調べて大陸分水嶺縦走の次の段階を想像する時、人生段階の差こ

それ、心の弾みには通うものがある。  
分水嶺の山旅を娘のみよに提案すると、乗り気。直ちに縦走路の北端、氷河国立公園の北半の旅を計画した。もちろん縦走はカナダの国境から南下しても、メキシコの国境から



北上してもよいわけだが、サソリの棲息する焦熱の地と氷河の点在する険峻な山群とでは魅力の落差が大きい。北端から始めることとする。

その山旅は1900何年か、みよの記憶も定かでない。当時購入、持参したザイルがまだある。岩登りでもないのに、何故ザイルなど購入したか、覚えの糸をたぐってみると、前述のWolf氏の案内書に、

The Trail passes under a sheer cliff at 23・0 (国境より23マイルの地点)。The Ahern Drift here is a permanent steep snowbank that blocks the Trail. Crossing can be dangerous, especially early in the season before a path has been cut and well worn. (p.32)

とある。このくだりを読み、山の経験の少ない

みよを確保するためのザイルに違いない。すると、この書に誌めた購入年の1988年が山旅の年であったとみえる。

氷河公園へ着くとみよは体調やや不良で縦走は断念。公園の東部にある Swiftcurrent に6日程幕営、四方に日帰り山行することになった。既に日ざしは真夏の勢いを失っていたが、好天に恵まれ、峨々たる峯々にかこまれたキャンプ場はかなりの人ごみ。到着の翌日はみよの快復を待って、近辺の湖 Swiftcurrent Lake と Lake Josephine へめぐり。

2日目は Iceberg Lake へと発ったが、山道はグリズリ熊のため立入禁止、やむをえず Apikuni Falls へ。翌日はグリネル氷河を見に行く。大陸分水嶺に囲まれた氷河が Upper Grinnell Lake の湖岸で崩れ、氷塊が湖面に小島のように点在している。日向でも肌寒い昼食。

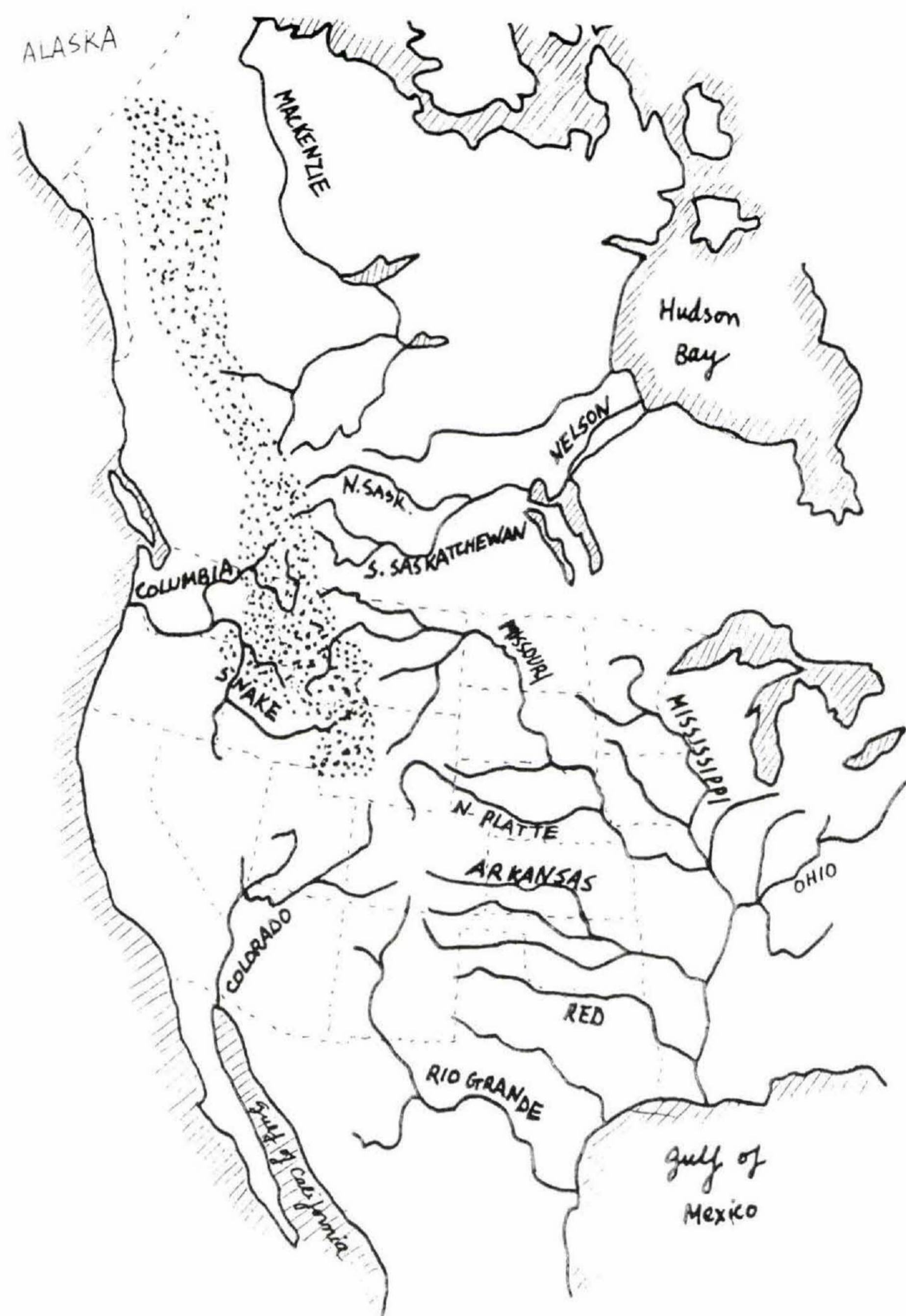
次の日は分水線上の Swiftcurrent 峠を目指す。稜線直下の Swiftcurrent 氷河から流れる溶け水は千尋の絶壁にかかる滝となり、その景観に讃嘆。しかし岩壁に刻まれた道は険しく、みよの疲れで峠は断念、下山する。大陸分水嶺の縦走の第一歩は将来を待たねばならぬが、みよと共に氷河公園の一部を楽しめた旅となった。



## (二) 氷河国立公園紹介

氷河国立公園は1910年の設立、米国立公園中の白眉。北西から東南の長さ約80マイル、幅約25マイルの長方形。ロッキー山脈の一部 Lewis Range をその主軸とし、モンタナ州西北に位置している。日本の国立公園と違って、ここは全部国有地。カナダの国境を越えると、1932年に設定されたウォータートン国立公園となる。

最高峰が一万一千尺に及ばぬので、高山地



帯とはいえないかもしれぬが、最後の氷河期の終る今から一万年前までは、ルイス連山は厚い氷に覆われていたため、地形は急峻。氷河の穿ったU字型の谷は深く、谷の絶壁には水平の岩層が判然としている。下部の最古岩層は8億年から16億年前に形成されたといわれている。

1万年は人類文化の歴史では永久だが、この岩層の僅か16万分の1。人生五十年に還元すると、消え行く氷層から岩峯が抬頭したの

はつい昨日。現在公園内に点在する氷河は五、六十数えられるが、19世紀半ばに150程あったものの、残存者はいずれも消滅の寸前にある。1930年代の写真と比較してさえ、現在の氷河が如何に縮小しているか驚かされる。

とすると氷河公園は21世紀の終末を待たず、無氷河公園に帰するかも知れぬ。しかし、消え去りゆく氷河が遺したこの絶景の山地を、国立公園として保全しているのは有難い。

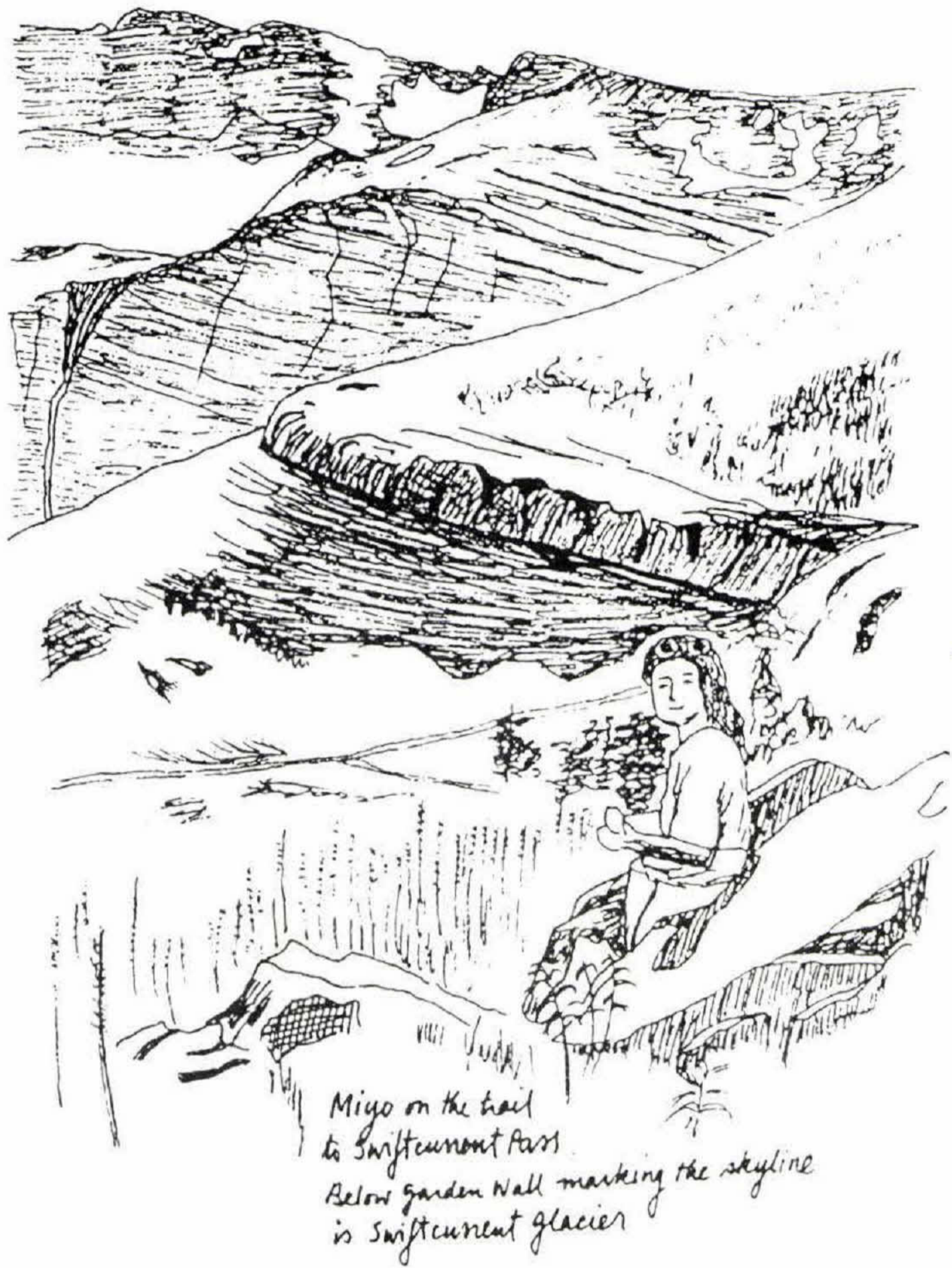
公園の南端に行く鉄道があるが、その鉄道会社が人口の多い東部から観光客を誘致するため、連邦政府に働きかけた結果と思える。公園の東南端にある東氷河公園駅まで足を延ばす乗客は近頃稀になったが、駅から見た山の輪郭は公園設立当時の1910年に遥かニューヨークから汽車の旅をし、当駅のプラットフォームに降り立った人の目に映った輪郭と変わらない。

## (三) かなめの氷河公園

観光客はさておき、長距離山行や自然と野生動物保全を志す者には氷河公園は要の存在。公園北端のウォータートン湖は、南下する大陸分水嶺縦走路の北端であるのみでなく、西行する Pacific Northwest Trail の東端でもある。

この山道は未完だが、幾多の山脈と北カスケードとオリンピック山塊の両国立公園を横断し、太平洋岸、シアトル市西方、オリンピック半島西北端に至る、全長1200マイル、有志者による一大企画。1977年に2人の旅人が走破して以来、凡そ30名が完走している。

これに加えて、最近「Y2Y」野生保全廻廊地帯設定運動が発足した。「Y2Y」とはワイオミング州西北のイエローストンから北はアラスカに隣接するカナダのユーコンとの意で「2」は「to」をもじったもの。全長二千数百マイル、面積は日本全土の3倍以上の



46万平方マイル（上掲の河川流域図で点を打った地帯）。

米国側ではグラント・チトン、イエローストン、氷河の三国立公園を内包し、カナダ側はウォータートンを始め、レベルストーク山、氷河（米国のと同名異物）、クーテナイの諸国立公園を内包している。（Douglas H. Chadwick, "Yellowstone to Yukon," National Geographic, 2000, 及び Karsten Heuer, "Yellowstone to Yukon," Backpacker, April 2000 参照）

この一大企画の発想は1991年に遡る。当時、無線発信器を首に付けた一頭の牝狼が、

2年間に南はモンタナ州ヘレナ市、西はワシントンとアイダホの州境、北はバンフ国立公園とカルガリ市を含む地域を徘徊したことが判明した。この地域は実にスイス全土の2倍の面積であり、その広範囲は従来の動物生態学の常識を覆した。この発見が動機となり、他の狼や、熊、大型山猫のリンクスなども行動範囲が同じように広大であることが判明した。

とすると、これら大型野生動物の保全には、点在する保護地域では不十分で、それらの地域を連絡・内包する一大廻廊地帯が必要であるとの結論が出た。この地帯内では将来の車道建設を禁止し、自然資源の採取は制限して、自然環境を保存し、既存の車道の要所には、野生動物横断路を設ける計画である。

Y2Y企画実地調査のため、1998～99年に上述のヒューザー氏が全長の4分の3にあたる2200マイルを走破している。6月上旬イエローストン出発、翌年の9月に目的達成。行動日数188日という。途中、熊との出遭い34回、目撃した狼は20頭、飛行機から落す食料補給法も使用している。一行動日平均12マイル、食料補給地点は22ヶ所だから、一補給点より次の補給点まで平均9日、約100マイルの山野跋涉。私有地横断は188日中、僅か10日というのも、新世界の国

柄だ。私有地が多いとY2Y設定の見通しがつきかねるであろう。

現在米国とカナダの両政府が設定を目指して協力していると聞く。またカナダのエドモント市から南下してユタ州を通過しメキシコに至る CANAMEX Highway と称する高速道路構築の企画もあると聞く。この高速道はY2Yを横断せざるをえないであろうから、Y2Y企画も前途多難であろう。

しかし設定されれば北米大陸中の大自然と野生の宝庫が確保されることとなる。そして米国内の大陸分水嶺縦走路の北部3分の1がその宝庫を通過することとなる。その暁には、イエローストーン公園内の分水嶺路を旅する者は、日暮れに狼の遠吠えを聞き、人間の所作は必ずしも自然破壊に限らぬと、心が慰むであらう。

#### (四) 米国大陸分水嶺

「大陸分水嶺」と聞くと、急峻な高峰を繋ぐ稜線を想像し勝ちであろう。しかし縁先から庭に打ち水すると、普段目に止らぬ起伏によつて水は流れて行く。組板のように平らだが、流域があるに違いない。蟻も庭の流域境界線は大雨ならば気付くまい。

1958年にロスアンジェルスからシカゴ行きの汽車に乗った。ニューメキシコ州で大

陸分水嶺を横断する際、車窓からの風景は、期待はずれの平坦な砂漠。「分水嶺」というより「流域境界線」といった方が語弊が無かろう。

米国大陸の西半を流域盤の嵌め合わせとしてとらえると、東面と西面とに分れる(河川流域図参照)。東面には北方ハドソン湾に流れるサスカチエワン川、南方メキシコ国境の一部をなすリオ・グランデ、そして中間にメキシコ湾に注ぐミシシッピ川の支流のミズーリ川、プラット川とアーカンソ川の流域盤がある。西面には北方、太平洋に注ぐコロンビア川とスネーク川、南方、カリフォルニア湾に注ぐコロラド川の流域盤。この東面と西面の紆余曲折した境界線が、いわゆる大陸分水嶺である。

#### (五) 分水嶺の縦走

旅人にはこの境界線は線ではなく地帯である。山あり谷あり、森林あり、草原あり、砂漠ありの地帯である。その地帯の中を所謂縦走路が曲折して行く。一日歩いて分水嶺を踏まぬことや、分水嶺を横切る峠を一度しか越さぬことが多い。槍から穂高のような縦走ではなく、普通は山野跋涉である。

アラスカとハワイを除いた米国の大自然を体験するには、大陸分水嶺縦走路

Continental Divide Trailを一步一步踏みしめるに越したことはない。しかし完走者は世界最高峰チヨモルンマ登頂者より少ないと憶測する。時間と労力の荷が重過ぎるのである。

その縦走には二つの型がある。一つは一挙全長走行型、一つは全長を分割して比較的短距離の縦走を連ねる系列型。一挙全長型は一年程の暇と、食料配給に周到な準備を要する。車の支援隊があれば助かるが、何ヶ月も支援を続ける時間的余裕のある人は多数とはいえず。系列型は短期休暇を利用しうるが、完走には何年、いや何十年を要するかもしれぬ。一区分ずつ入山と下山が加わるため、距離は延びるが、各地の土地の佇まいに親しめる。

"Where the Water Divide(1993)"を著した Karen Berger と Daniel R. Smith はメキシコ国境から春、新婚旅行に発ち、晩秋モンタナ州 Chief Joseph Pass で大雪に閉ざされ、一旦山行を断念、翌夏その峠より再攀北進、600マイル程歩いてカナダの国境に達している。全長3200マイル、登り三十万尺(インド洋からチヨモルンマ登頂の何と10倍以上)、合計233日の行動。これは一挙全長に準じた型だ(この本の1993年版は写真無し、写真入の後版をお薦めする)。

私は仕事の関係で系列型を余儀なくされる。

一山行に、車旅も含めて1週間か2週間かけ、去年は例外で二山行したが、普通は一年一山行。一山行の日数は時間の余裕と荷担力の限度によって限られる。

荷は無論出来得る限り軽量にするよう努めているが、今迄の経験では大体10日が限界。今回は太公望が同行するので、油炒めの岩魚の夕食が楽しみだが、負担食料の軽減は釣具の加担で殆ど帳消しか。耐熊食品筒が2筒で5ポンドと重い、当分熊の棲息地帯なので使うことになる。その他超軽量テントとか色々工夫しているが重荷の軽減には限界がある。

1日の歩行距離は個人差が大きい。BergierとSmithは分水嶺全長を1日平均13・7マイルで踏破している。この平均距離は現在の私には不可能であろう。可能であったとしても、強いて急ぐこともない。今回は行動日数9日、沈澱1日、全長70マイルを計画している。1日平均8マイル、強行軍ではないが楽ともいえぬ。

問題は山行頻度である。来年以後は phased retirement として授業の責任が半減するので、1年3回の縦走行を考えている。引退後は4回も出来よう。

もう一つの問題は、どれほど体力が続くかである。しかし、負担に耐えねば、アルパカ、

ラマ、山羊に荷す方法もある。健康で日常の訓練を怠らねば、当分続けられると樂觀している。一方、健康も生命も儂い。続く限り大切にのみ。そしてその大切にすする方法が分水嶺の山歩きということになる。

#### (六) 目標

芭蕉は1689年5月から10月まで、奥の細道を旅した。当時45歳。「舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふる者は日々旅にして旅を栖とす」と書いている。生涯という旅には目的地が無さそう。有ったとしても、芭蕉は、日々旅をして行くこと自体に人生の実体を把握して行ったのであろう。

米大陸分水嶺の山旅も、私にとって、芭蕉の観た人生と通うものがある。完走よりも行程を目前に置き、一步一步踏みしめて歩くこと、一日一日の行程の山地に浸ること、一回一回の山行を体験することに重心を置き旅をしたいと思う。「旅を栖とす」とはこのことであろう。

大陸分水嶺の縦走には、一刻千金の側面に加えて、過去・現在・将来の連続性の側面がある。一步は一日の行程につらなり、一日の行程は一山行の一部となり、一山行は全長縦走の一部になって行く。

モンタナを歩いていて、遥かワイオミング

のウインド・リバー山系とメジシン・ポウ山脈間の平坦な乾燥地を思うこともある。150マイルの道程。その一部は流域境界線が二分して、中間の降水は流出せず、一部は蒸発し、一部は地下に浸透する。この乾燥地の横断にどれほどの水量を担ぐ必要があるか。冬のスキー行なら、特に猛吹雪に遭えば極寒だが、水の心配はない、などと考える。

友人のべブはそのような地は度外視して、秀景の山岳地帯だけにしたら、と盛んに薦めてくれる。しかし今の処、選り好みせず、連続性を貴ぶ態度に執着している。

一旦その平坦な乾燥地を越えると、ワイオミング南部からコロラド北部に連なるメジシン・ポウ山脈に入山、続いてフロント連山と昔5、6日山行を楽しんだサン・ファン山塊となる。何れも一万四千尺級の峯が多い山並みだ。

芭蕉も「人跡稀に、雉兔芻蕘(獵師や草刈り、きこりの意)の往かふ道」をたどり、月に登った折は、「雲霧山気の中に氷雪を踏んでのぼる事八里、更に日月行道の雲関に入るかとあやしまれ、息絶、身ごごえて、頂上に臻れば日没して月顕る」と誌めている。一万四千尺の峯に息絶え、身ごごえて至れば、この名文を思い起こすであろう。

サン・ファン山塊を後にすると、ニュー・



メキシコ州サンタ・フェ市に近い。まさに「前途程遠し、思いを雁山之暮雲に馳す」である。

「旅を栖とす」と「前途程遠し」とは感覚に多少ずれがある。旅を栖とする人は、雁山到着に執着してはいないのでなかろうか。すると、雁山之暮雲観ずして功ならずとは覚えなない。しかし私は芭蕉に与しよう。彼の俳人さえ、無目的に逍遙していたわけではない。予め道程を組み、もも引の破れをつづりつつある芭蕉の心に松島の月がかかっていたのである。

## (七) 訓練

元来人間の体は、進化路線上、狩猟採取経済に順応して進化して来たが、近來、突然日暮し硯や計算器に向って時を費やし、どこへ行くにもはや、車やとり、船に乗るようになった。この新生活は、体の生理が適応するには、日が浅く、体に異常をもたらさざるをえない。この場に人工的運動が登場する。弓矢をたずさえて草原に野牛を追っても、五千米競争に参加しても、筋肉細胞の新陳代謝には大差ない。

禅宗に経行（きんひん）という修行がある。樹間、堂前などを極くゆっくり歩き乍ら、足の裏の圧力の移り変わりや、脚の屈伸の感覚な

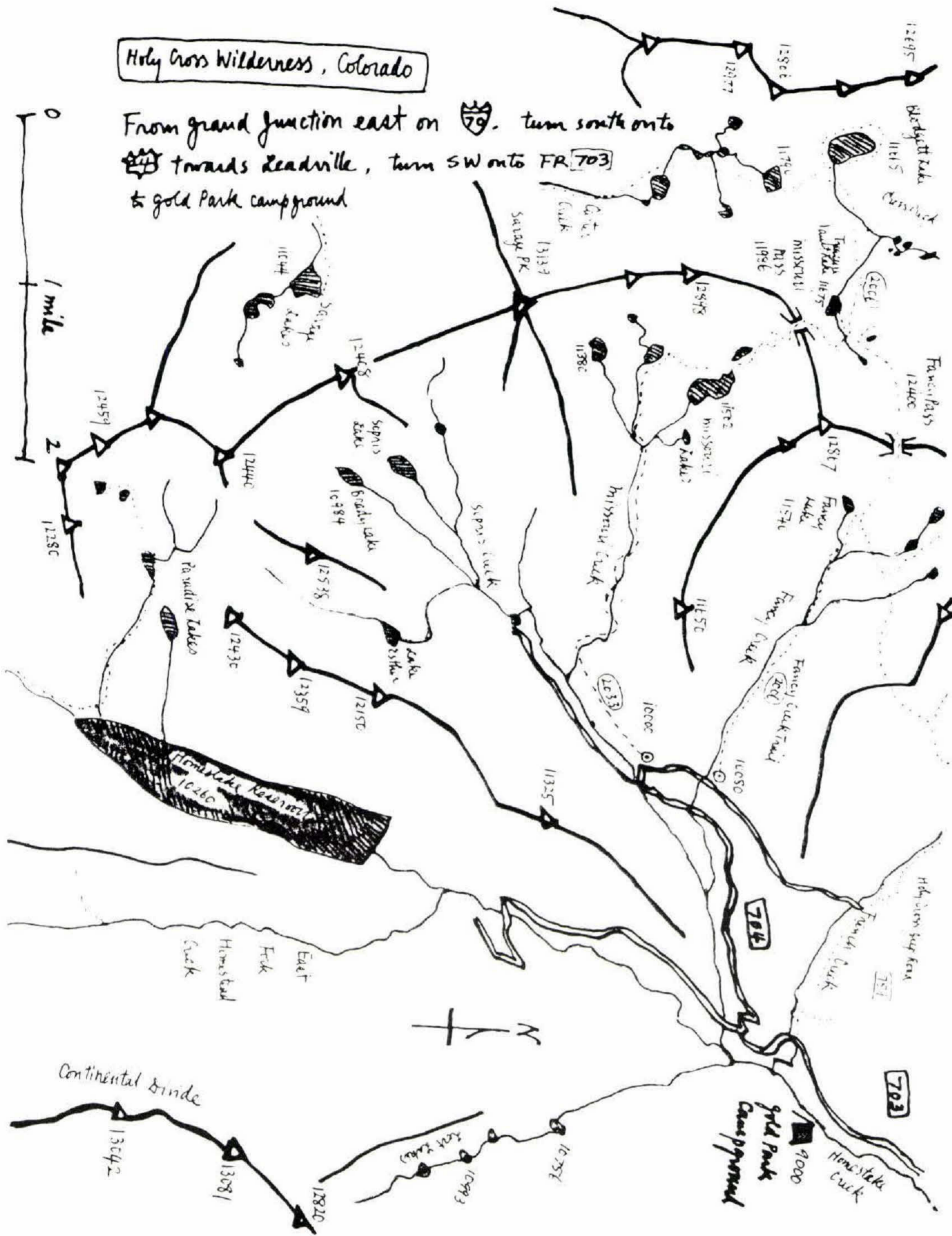
どに意識を集中する。その効用には、遠行に耐えられるようになる、思惟に耐えられるようになる、病にかかりにくくなる、食物が消化しやすくなる、長く禅定できるようになる、の五点が挙げられている（「岩波仏教辞典」173頁）。

体調を整える効果と、心理的、精神的効果が組合っているのは興味深い。一般に、遠行や長距離走行のように、単調で技巧のいらぬ、たえず反復する運動は、体感への意識集中に適している。心が体に浸ると、源泉に立ち帰ったように、元気づき、雑念が去るのではなからうか。

私はマラソンを走ったことがある。3時間17分で走り、ポストン・マラソンに50才から54才組に出場する資格を得た。その頃習ったことだが、マラソンの訓練は多角的だ。先ず地固めとして、週20マイルから30マイルのジョギングに慣れてから、1週間か2週間に1回走行距離を徐々に延ばし、マラソン走行前3週間に20マイルに近づける。これで完走には十分。更に走行時間の短縮を目指す場合は、跳ね上り、尻蹴り走り、登り坂走りなどの反復訓練を加える。これで、耐久力、爆発的力量と速力の三要素が整う。

私の短距離反復訓練は主として、1マイル6分走の反復。1マイル走って400mの

ジョギング休憩のくり返し。これを1週1回で2ヶ月程続けた時、1マイル6分のペースが身につき、ストップウォッチ無しで正確にそのペースを持続できるようになった。少しペースを落して6分20秒か6分40秒かも、体感から感知した。心が体に浸ると妙なものだと思った。



多角的訓練は走行自体の諸要素と、身体組織の複合性を反映している。身体組織面を見れば、最も強化しやすいのは呼吸循環系、次は筋肉。腱、靭帯と骨は強化に最長時間を要するので、訓練過度にならぬよう注意が肝要。この原理は観念的には簡単に理解できるが、訓練の最適度を体で感得するのは容易なこと

ではない。私の日常運動は最近漸く多角的になり、軌道に乗って来た。1週間に自転車約5時間、その大部分は通学。大きな針金づくりの籠をハンドルにとりつけた仕事車で、殆ど毎日使い36年になる。3速ギアだが、最低のギアしか使わないので、単速車と同様。登り坂は立ち上ってペダルを踏む。

普通はごくゆっくり行くが、ユタ大学構内の一辺に100m程の登り坂の道があり、毎朝そこにさしかかると、全力疾走することにしている。雨風のはげしい時は、これで自転車を見送るようでは、とうてい山には行けぬと重い、「氷雨さらさら降ろうとままよ…」を思い出して挑戦する。しかし、自転車使用の難点は悪天ではなく、自動車交通。幸いにして未だ当てられたことがない。普通の場合、盗難も問題だが、私のはいかにも重そうなお朽車で、泥棒に注目されるしろものではない。走りは1週2回、計2時間。10年以上、週1回しか走っていないだったので、2回目を加えんとした頃よく怪我をした。やっと最近週2回の走行に脚腰が順応し、新しい習慣が身についた。自転車とジョギングの合計は1週約35マイル。自動車運転距離はその距離以下に制限するよう心がけている(遠出の山行はその例外)。

私の患った怪我の一つは坐骨神経痛という曲者。椎間板が厚みと弾力性を失ったために脊髄の異常を来たし、脊髄から出て、臀部を經、脚に走る神経に支障が起る。長距離走者がよく悩む怪我である。初めてこの曲者に悩まされた時、医者に、一回患うと再発しやすい。走りとは山は控え目にと云われた。

運動の楽しみを知らぬ医者忠告と高を括っていたら、案の定、二回、三回と再発。三回目の時、そのための治療薬が胃潰瘍を起こすという破目に陥った。今度は運動専門医に診てもらおうと、腰臀部の柔軟化と腹筋、背筋の強化を1日2回、起床直後と就寝直前にするよう指定された。さる2月のことである。指定された運動は今も怠っていない。効能ありとみえて、爾来腰痛は再発していない。

私の日常運動のもう一つの要素は1週2時間の重量訓練。大学に職を有つ人々を対象とする体育クラスが種々あり、私は4年前環状訓練 circuit training から始めた。環状に配置された20台程の運動機械に縄跳び、懸垂などを加え、計30に近い種目を1種目に一定の時間をかけ、順を追って2周する。

始めは慣れない運動なのでしばしば負傷した。次第に危険な種目は省き、他の種目を入れて補充するようになったが、順序を追って周る人たちの妨げにならざるを得ない。2年

続けてやめて了った。翌年、負傷の原因は関節の柔軟性欠如と考え、stretch and strengthen と呼ばれるクラスに加わったが、この試みは挫折。柔軟体操や屈伸運動でコーチの励ましに応じて無理をし、脚腰の靭帯の負傷が続いたからだ。

結局、自分の体はどれ程の伸長や圧力に耐えられるか、十分に感得するまでに3年を要した。それ以来、友だちに薦められ重量訓練を始め一年近い。重量訓練は機械運動もあるが、多くは機械なしで、バーベルなどを使う所謂 free weights。全力で辛うじて6、7回操れる重量の45か50%が普通の重量。瞬発力より耐久力を養うため重量は控え、反復回数を多くする方針。これは負傷率が低いという利点もある。

結果は上半身の強化で、下半身との筋力均衡感を得、体が統一された感じ。半世紀、蹴球、山、山スキーと下半身ばかりの運動で、この均衡感を欠いていただけでなく、欠いていた事にも気付かなかったのは今思うと不思議なようだ。山での重荷もさほど苦にならず、坐骨神経痛予防効果も医者に指定された運動と共に、重量訓練に負う所が多い気がする。

大陸分水嶺縦走を期する訓練は週10時間の日常運動を基盤とし、その上に晩春から夏にかけて、日帰り山行、5回から10回くらい。高

度差も荷も徐々に加担して行く。去る3月末に、米国自動車横断旅行中の上原・塩川両兄に久し振りで再会、その折ユタ大の裏山に同行したのが、今年の脚慣らしの第一歩（針葉樹会報第91号、上原利夫「山男の北米大陸横断ドライブ」2000年6月、P19、23参照）。

それ以来7月末日まで9回日帰り山行。その中の最後の山行は塩湖城西方、標高1万5000尺のデザレット峰という山で、鍛錬のために荷を背負った6時間の山歩き。翌日殆ど疲れを感じないのは、体調が整ってきた徴だろう。同行は38才のエイミーという女性。娘のみよの友だちで、旧知だが、山では初顔合せ。来る8月8日よりモンタナ州の分水嶺縦走に同行する計画なので、相互自己紹介もかねる。

結果は、彼女は評判通り体力旺盛、頑丈な体格で、一日かなり急な登り下りをして、一向疲れを見せない。日頃の運動はと訊ねると、車は有るが日常使わず、通勤（ユタ大図書館勤務）、買物は凡て自転車、1週間の自転車走行10時間程という。そこで思い出したが、私の通学途上で追越されたことが何度かあった。登り坂で、おはようと後から声がかかる。瞬時にしてエイミーの後姿。自転車の機能の差もあるが、体力の差も否めない。

山路でも同様。背負い重量に差があるが、

同等に負担しても、差がありそう。モンタナ・ロッキーで彼女が消耗して私の負担になる心配はない。心配はむしろ、彼女にペースを下げて同行する辛抱強さがあるかだ。というのは、グリズリ熊の山では一人歩きは禁物とされているから。

### (八) 後記

待望の8月に入ると、モンタナ・ロッキーは山火事頻発の報道がはやり、情勢は日々悪化するのみ。残念至極だが、今年のモンタナ行は断念を強いられ、償いにコロラド・ロッキーに脚を向けることにした。聖十字架原始山岳地帯 Holy Cross Wilderness Area と呼ばれるところだ(岩壁を遠望すると十字型の残雪がある山に因んだ名)。

しかし、結果はまたもや挫折。自動車故障で一日を棒に振ったのち、入山時私が下痢を患い、脱水状態が高山病をもたらしたからだ。私は、下山するから計画通り山旅を続けるよう勧めたが、エイミーは病人単独行の道理なしと、聞き入れない。已むなく共に下山した。

計画は、Gold Park Campground (地図参照)に一泊後、Missouri Lake へ入り、Missouri Pass を越え Blodgett Lake に野営、3日目は Carter Creek 沿いの湖を探索、4日目は Fancy Pass を越えて下山。

計画通り、初日は、1万3000尺前後の山並みに抱かれた谷に入り、点在する湖の一つ、地図に11502(標高尺)とある湖を見下ろす丘の上にテントを張った。強い西風を孕んだテントを制するのに二人の手を要した。暗雲が西の稜線より巻き上がり、にわか雨をもたらした。夕暮れ11502湖岸を一周したが、衰弱がひどく、手ぶらで、五、六歩歩いて立ち止まり一息つかねばならぬ始末。湖のただずまいも、湖岸の花も目にしみるほど美しく、写真に収めたいが、カメラを取りにテントに帰る元気もない。夕飯、食欲なし。終夜豪雨。下痢は辛い、夜明けまで

### 蓼科に住む(アダージオ開業記)

松尾 信孝(昭48)

真夏と比べると夜明けが遅くなった9月終わり頃。今朝の最低気温は5度。ストーブを入れた。ラジオは東京の最低気温を20度と報じている。真夏にはなかなか見渡せなかった甲斐駒、仙丈もくつきりと見える日が増えて

テントの中が濡れぬのは有り難い。翌朝、依然として衰弱続き、食欲なし。雨の中を、再起を期して、下山。

秋分の朝、ユタの山は初雪の銀白。上原・塩川・安間兄と登ったユタ大の裏山も薄白衣。北面、白衣の裾には、7月の山火事の焼跡が黒々と見える。今年は11月末の感謝祭を利用してデザレット峰に登り、登り納めしよう。来年の夏はモンタナ・ロッキーへ遠征2回を企画している。モンタナの山火事も、同じ寒冷前線がもたらした雪を溶かしつつ、燃え尽きたに違いない。仔熊の足の裏の火傷も治ったろう。

きた。暖かい格好をしても朝テラスに座ってコーヒーを飲むには寒すぎる陽気だ。

Because, because …… と言えば実にたくさん(の)に Because と言うことになる。そう考えると確かにそれほどの変化があったわけだ。一年前には一応会社の米国派遣員として会社人間だったわけだ。今は蓼科のペンションの親父。趣味でやっていたペンキ塗りとか木工とか草木の手入れとかが仕事の一部になっている。2つだけ Because を言うと、そしてそれがほとんどすべてを語っていると





- 思うが、
- 1 いつかは山に住みたかった。
  - 2 サラリーマンをやめる潮時だと思った。

3 月半ばに帰国してからこれまでを振り返ってみると2つの段階に分けられる。もっぱら頭を使った開業(7月1日)までと、もっぱら体を使った開業後、とりわけ7月後半から8月いっぱい。

頭を使う部分は大きく分けると、1 物件の決定、2 パンフレット等の宣伝材料、3 改装と内装のプラン、だろうか。物件を決めるプロセスの一部分をかいつまんでご披露する。

物件はインターネットのお陰で帰国するまでには大体絞り込めていた。商売抜きでは本当は鹿島槍が良く見える大谷原のうえの黒沢峠付近か、大町の東山。多少商売を考えると神城か昔の細野(白馬)近辺にしたかった。

但し前二者は客が来ないと思うので経営が成り立たない。後者は商売があまりにも天候(積雪)に左右されすぎる。もっと言えば、多少昔を知っている身には今の変わりようは到底その

変化に自分の生活を浸して住み着く気にはなれない。学生時代には神城駅から又寛さんの家に寄って、それから林の中の道を遠見尾根の取り付まで歩いたものだ。今そのあたりに200軒からのペンションがあり中には経営が厳しいところもあるという。過当競争だ。

それではと不動産屋が持ってきたのが蓼科の東急リゾートにある物件2つだった。いずれも現役ペンションで一つは今のアダージオがある物件で、もう一つはその目と鼻の先にあるやつ。ロケーションには申し分なかった。東京には近くなるし、名古屋も同じくらいの距離。大阪からも近い。

昔のことを知らないからすべて as is で受

け入れられる。東急リゾートは管理費は高いがその分管理が行き届き整然としている。用途も限定されており、いきなり隣にフィリピンパブが出来たり(事実北軽井沢で見た物件にそういうのがあった)、鶏舎が出来たりしない(日本では行政がゾーンニングについてまったく無力でごらんの通りの無秩序が全国で氾濫している)。

この2つの間で迷った。ひとつは眺望抜群。ベランダからは原村、富士見高原の向こうに鳳凰三山、早川尾根、甲斐駒、鋸、仙丈と連なる大パノラマがひろがる。これは魅力だ。但し建物が少しくたびれている。もうひとつは1200坪の敷地の中に小川も流れ、木立に囲まれて静かな落ち着いた佇まい。建物の状態も悪くない。

どう考えても後者だが、そこは元岳人のはしくれ。山が見えることは捨てがたい。迷った末もう一度見に行ったとき帰りに玄関の上がりかまちに腰を下ろして靴を履きふと顔を上げたその前に木の間越の正面に甲斐駒とその横に北岳の顔が見えた。「おお、見える見える」。それで今の物件に決めた。

頭を使う方は、はばかりながらこれまで多少はやっていた部分だ。使った結果うまくいかなければ経営判断のミスだ。問題は体を使

う部分。何しろ、当然のことながらこれまで接客業などやったことがない。

それらしいことを教えてくれそうな連中もいたが、会って話を聞くとむしろいかに効率よく儲けるか、いかに手を抜くか見たいなことに重点が置かれている。例えば、「ベッドメーカーに邪魔だからヘッドボードは無い方がいい」など。確かに写真を見るとベッドにヘッドボードのないペンションも結構ある。こういう連中の言うことを真に受けるわけにはいかないと思うた。

アメリカでこの種のセミナーを受けたことがあるが、徹底していかに客を満足させるかということに焦点を置いていたのと対照的であつた。ならば、あとは自分達で考えるしかない。アメリカで叩き込んでいたことを原点にして、それにこれまで自分達が受けたサービスでよかつたと思うことを、自分達で出来る範囲で実践することだ、と思った。

別の言い方をすれば、それしか素人の我々が差別化できるところはないだろうから。幸い、仕事で世界各地を泊まり歩いたし、アメリカでもいくつもB&Bに泊まった事があり、よいサービスは良いと思ひありがたく思つていた。

かくて、5月末の引渡し、6月ひとつきで

の改装を経て7月1日の開店までこぎつけた。初日は、朝食で客が食事が終わりそうなときにパンをまだオーブンの中で暖めたまま出すのを忘れていたことと、ベッドサイドのランプに電球を入れ忘れていたこと位のミスで済んだ。

中高年が気取らないで快適に、ゆつくり出来る空間と時間をリーズナブルな価格で供給するというのが基本コンセプトで、部屋数を減らして(8室を5室に)各部屋を広くし、それぞれにバストイレをつけ、さらにトイレにはウオッシュレットをつけた。食事は和食系とした。煙草は分煙とし、食堂ロビーは禁煙。喫煙者専用客室は2つだけとした。

料金は少しだけ高めとした。客層をある程度絞りたいのと、最盛期のフルキャパでも収容が少ないのでそれを少し埋める必要がある。これくらいの設備ならもつとつてもいいのではないかという声もあるが、前述のごとく価格はリーズナブルにしたいのと、ねらいはむしろ広くゆつたりとした空間と時間を求めてオフシーズンにも客が来てくれることを求めているからだ。

最終的にこれらのことを決めるのには迷いもあつた。特に煙草の部分。その結果喫煙家の客を減らすかもしれないと思つたが、煙草

を吸わない人の快適さを優先した。それがポリシーだ。

そして、夏が終わつた。これからいよいよ蓼科に住んだことの本領を発揮しなければ。1200坪の敷地には実に多くの野草が生えている。花もたくさんある。これまで山に登つていてもあまり花などには興味を持たなかつたので名前も良く知らない。

最初、わかるのはニッコウキスゲとドウダントツジ位であつた。ちなみに最近トリカブトが生えているのを発見した。毎朝、ひまわりの種をまいておくとリスとか野鳥が食べに来る。野鳥の名前まではまだまだ。「ウソ」だけはわかつたが。

八ヶ岳峰までは1時間半で行つて来れるので朝晩の散歩に犬とちよくちよく登ってくる。空気が澄んで来たので夕日を見に行く回数も増えるだろう。朝日は八ヶ岳に隠れて登るのは見えないが遠く槍穂が染まるのが見える。とりあえず八ヶ岳案内人の試験も受けてみよう。今年は何もしてないのでお試しという事だ。

開業したばかりにしてはこの夏はそこそこ繁盛したと思う。問題はオフシーズンのこれから。本当はアダージオで一番快適に過ごし

ていただけるのは静かなオフシーズンだと思  
う。皆様是非お誘い合わせてお出かけくださ  
い。諏訪のあたりを通りかかり時間があつた  
ら様子を見に寄ってください。

ペンションの親父なんて、忙しいときは  
は体（と、少し気）を使い、暇になったら宣  
伝等に頭を使えばよい。晴耕雨読とはこうい  
う事をいうのだと思う。いずれそうなる。皆  
さん一足お先という感じだ。

## 凍傷で入院して

田形 祐樹（平6）

私は、97年2月に、現役の学生として八ヶ  
岳に行った時に凍傷を負い、10日間の入院を  
余儀なくされた。その時の様子は、当時、電  
子メールで一部の人にお知らせしたし、また、  
その内容の一部が現役の山行報告書にも載っ  
たことで、知っている会員の方もいると思う。  
しかし、すべての会員が知っているのでは  
ないし、現役の学生の中にも知らない人がい  
るだろう。

そこで、やや古い話ではあるが、私の経験

最後に、早速お泊まりいただいた同級の  
西牟田氏、竹中先輩御夫妻、百名山完登乗鞍  
岳遠征の途中に寄って下さった高橋先輩と同  
伴の名和先輩、様子を見に寄って頂いた中西  
先輩御夫妻、その他アダージオを応援してく  
ださった方々に誌面を借りてお礼申し上げま  
す。

これからも時々蓼科の様子をお伝えでき  
るほどにゆとりが出来ればいいのですが。

が、少しでも皆さんに役立てばと思い、凍傷  
を予防するという観点および凍傷を負ったら、  
どうすべきかという観点等から、本稿を著し  
た次第である。

まず、凍傷を負った時の状況を簡単に述べ  
る。登山コースは、行者小屋を出発し、文三  
郎道経由で赤岳山腹に行き、あとは、横岳、  
硫黄岳を通って、赤岳鉱泉に下りるといふ平  
凡なコースである。当日の天気は快晴、そし  
て風は非常に強かった（下界では、確か「春  
一番」が吹いた日だった）。

それでは、なぜ、私が入院しなければなら  
ないほどの凍傷を負ったか述べてみたい（同  
行した現役諸君も、ホホや耳に凍傷を負った  
が、それほどひどくはなかった）。

まず、なんととっても風が強い八ヶ岳だっ

たということである。そして、私よりペー  
スの遅い現役諸君のペースにあわせて登ってい  
たため、血のめぐりが悪かったということも  
ある。そして、もともと、私は低血圧でかつ  
貧血ぎみで血のめぐりがよいほうではない。  
そして、これが最大の原因であると思われる  
が、下の毛の手袋の指先のうち、2、3本が、  
わずかに穴があいていたことである。オー  
バー手袋は、新しいししっかりしたものだった  
が、どうやら、休憩中にレーションを食べて  
いる時、雪が入ってしまったらしい。

登っているときには、まったく気付かな  
かったが、赤岳鉱泉に下りてきて、レーション  
を食べるために、オーバー手袋をとったと  
ころ、左手の中指と薬指がまったく曲がらな  
いため、下の手袋をとってみると、その二本  
の指が第二関節から指先までが真白で、ロウ  
のようになっていた。

その日は、下界に下りず、行者小屋のテン  
トでもう一泊したのだが、医者でない私がで  
きることにいったら、お湯に患部を浸して「解  
凍」するぐらいしかなかった。結果的に、二  
本の指を失うことはなかったが、その日のう  
ちに、疲れていても下山して、病院に行くべ  
きだったのではないかと思う。もし「切断」  
することになっていたとしたら、「あの時、  
下山しておけばよかった」と後悔することに

なつたであろうし。

次の日、凍傷で水ぶくれした手で車のハンドルを操作し、現役諸君を車で東京まで送り、横浜まで帰った。この日は日曜日だったので、病院に行ったのは、翌日の月曜日だった。

ここからは、重い凍傷を負ったら、どうすればいいか、具体的には、どの病院に行ったらいいかについて述べたい。

私はまず、当時の職場の近くにある東京医科大学付属病院に行った。実は、私は、その2年前にも、八ヶ岳で軽い凍傷を左手の指先1本に負い、当病院に行っている。その時は軽かったため、登山から1週間後の海外出張も包帯をまいて行くことができた。「今回も大丈夫だろう。2年前と、偶然にもシチュエーションが一緒だし、また、1週間後の海外出張にも行けるだろう」と高をくくっていた。

ところが、今回は重症だった。医者にも「これはちよつと危ない。もしかしたら…」と言われてしまったのだ。その医者の背後にはインターン生や学部生と思われる人が4、5人いて、私の患部をのぞいていた。重い凍傷は当病院では珍しいらしく、どうやら私は「凍傷の臨床例」として、彼らのよい標本となっていたようだ。

海外出張をドタキャンしても、クビになることはないだろうが、指がなくなってしまう

かもしれない。茫然としてしまった。冬山登山の凍傷で指を失うという話はよく聞くが、まさか私もそうなるとは…。

そこで、「できるだけいい医者にかかりたい」と思い、電子メールで情報を集め、古田氏から、聖マリアンナ医科大学東横病院（武蔵小杉駅近く）の金田正樹医師を教えてもらった。彼は、登山における凍傷治療の第一人者ということで、登山界では、結構有名だ。彼にも「これは切るしかない」と言われれば、仕方がない、という心境で、その病院に行った。

彼は、私の患部を診て、「ちよつと悪いけど、なんとか大丈夫。すぐ入院して」と言った。なんとか指は、つながりそうだということで、ホツと安心した。治療は、もっぱら、血液の流れをよくするため、点滴を打つもので、外科治療は一切しなかった。その結果、10日間退院でき、指はつながったままであり、現在では日常生活には何の支障もない。

ただ、冬の寒い日になると、凍傷を負った部分がジンジンする。患部だった皮膚は、やや突つ張ったままであり、左手で完全な握りコブシをつくれぬ。また、あの登山以来、冬山には行っていないので（この凍傷でイヤになって行っていないのではなく、個人的事情のため登山自体休止中だから）、厳しい冬

山で大丈夫だろうか、という不安がある。

それでは、以上の私の経験から、凍傷に関して、自戒の念も込めて、いくつか教訓めいたことを書いてみたい。多くの会員の皆さんには当然のこともあると思うが…。

① 山では「いい加減」はいけない。下界では、結構「結果オーライ」のこともあるが、山では一瞬のミステイクが、生命、身体の危険を惹起するのである。準備や天候のチェックを絶えず行い、注意を払うこと。私が社会人山岳会に在籍していた時、下界では結構いい加減な人が、山では、非常にキチンとしていた。ある意味では、下界での仕事以上に、注意を払うべきと言えよう。なんと言つても、油断したら死んでもおかしくないのだから。これは、冬山の難しいコースのみならず、容易なコースでもそうだし、もちろん、冬山の縦走でもあてはまる。

② これは①とも関連するが、「準備をケチるな」ということ。私は、当時薄給サラリーマンだった（現在は金持ちになったのではなく、失業中）ので、装備をケチっていたところが、凍傷の原因となった。下の手袋は古いものだった。でも、こんなものをケチつて指がなくなったり、死んでしまったりしたら、こんな馬鹿馬鹿しいことはない。資金力のある（？）OBの方々は、この心配はない

かもしれないが、現役部員の方々は気を付けてもらいたい。極端な話、厳しい登山をするなら、教科書を買ったり、彼女とデートするコストをカットしてでも、装備に力ネを使つたほうがいい。その意味で、近時、現役が雪崩対策としてピーコンを購入したことは賛成である（少々高価だが、命には替えられない）。

③ 最後に、「重い凍傷になったら、金田医師のところいきなさい」ということ。比較的軽い凍傷なら、近くの病院でもいいだろう。私は、外科治療が必要なほど、重症でなかったので金田氏の名医ぶりを具体的に知ることではできなかった。しかし、エベレスト遠征に同行し、あの加藤保男の足を切り、長尾妙子の鼻を削った、凍傷治療の第一人者である。この人に診てもらってもダメだったら、諦めがつくであろう。彼自身も山男であり、かなり荒っぽく、私の傷など、彼から見ればたいしたことないらしく、通院最後の日に、無理やり旧皮をはがされたりしたが…。

以上、私の経験を踏まえ、凍傷について書いてみた。本稿が皆さんの冬山登山にいくらかでも役立てば幸いである。なにはともあれ、凍傷を負わないように予防することが、最も重要なことは言うまでもない。

京橋の明治屋本社にあった故磯野計蔵さんのオフィスに何度か邪魔した事があるが、社長室の壁面を飾る山の本に圧倒されたものだ。そしてサラリーマン社長ではこうは行くまい、オーナー社長だから出来るのだらうと思つたものである。

その中には木暮理太郎さんの「山の憶ひ出」上下2巻が3組ばかりあったが、その一組は小暮さん愛用の浴衣地で装丁された特装本だと教えられた。それに磯野さんは山だけでなく、中央アジアにも興味をお持ちだったようで、ヘイデンの本なども随分集めておられた。

そしてこれらの蔵書は磯野さんが亡くなられた後、日本山岳会に贈られ、日本山岳会では磯野文庫として一般の蔵書とは別の書棚に銘板をつけ、磯野さんの遺影を添えて大切に保管している。

さらに先年望月さんが海外の主要なヒマラヤ関係の文献を網羅した洋書のコレクションを日本山岳会に寄贈された。これは大変貴重なもので、アルパインジャーナル、ヒマラヤンジャーナルのバックナンバー、戦前のチベット側からのエベレスト登山隊の記録などがズラツとならぶ様は壮観である。

私が長い間お借りして翻訳した、1932年のアメリカ隊のミニヤ・コンカ登頂記「Men Against The Clouds」もここに納められている。最近入会された人を案内して図書室を巡り、望月文庫の前

## 磯野・望月文庫 見学会

山本 健一郎

に立ったら「望月さんは本当にこの本を全部お読みになったのでしょうか」との質問を受け、思わず本は読むために買うのでしょときつい口調で言ってしまった。

そのような次第で磯野・望月両先輩の蔵書が日本山岳会の図書室に納められているのは、日本山岳会の会員には良く知られているが、針葉樹会の皆さんはご存じない方が多いのではないかと、今年6月の総会の席上で7月7日（金）に磯野・望月両文庫の見学会をするのでご参加下さいと呼び掛けてみたら、20人くらいの方が手を上げられた。

そこで山岳会の集會室を予約してお待ちしていたが、当日は生憎台風が接近して関東地方にも暴風雨警報が出る始末、予定の半分ほどの人数しか集まらなかったが、両文庫の偉容に触れ、さらに故渡辺九郎さんが描かれて、寄贈された「プカヒルカ北峰」と題する絵を観賞した。

偶然小生がテニスで知り合った九郎さんのご子息、渡辺聡さんも参加されご父君の描かれた絵を初めて見ますと感慨深げに見ておられた。軽いつまみとビールで喉を潤し、和やかに針葉樹会の諸先輩の思い出話に一時を過ごし、参加者は雨の街に消えていったが、印象に残る一夕であった。

# 会務報告

## 平成12年度針葉樹会総会の報告

### 1 平成11年度活動報告

- 懇親山行 実施せず
- 評議員会 11年6月18日
- 総会 11年6月24日
- 新年会 12年2月3日
- 会報 11年10月89号発行  
12年2月90号発行
- 会員名簿 簡易版を11年12月配布

### 2 平成12年度活動予定

- 懇親山行 10月28・29日実施  
有明山ほか
- 評議員会 12年6月23日
- 総会 12年6月30日
- 忘年会もしくは新年会 未定
- 会報 12年6月91号発行  
12年11月92号発行  
13年2月93号予定  
13年6月94号予定
- 会員名簿 年1回配布予定

### 3 役員改選

- 会長 石原 脩 (留任)
- 副会長 高崎治郎 (留任)
- 評議員

- 松下順吉 (留任 昭19)
  - 小林茂雄 (留任 昭19)
  - 中村正司 (新任 昭28) 退任 樋口洪
  - 石井左右平 (留任・議長 昭23)
  - 山本健一郎 (留任 昭32)
  - 中村 保 (留任 昭33)
  - 市畑 進 (留任 昭33)
  - 高橋信成 (留任 昭38)
  - 原博 貞 (新任 昭42) 退任 小野肇
  - 中村雅明 (留任 昭43)
  - 西牟田伸一 (留任 昭47)
  - 井草長雄 (留任 昭48)
  - 藤本敏行 (留任 昭51)
  - 近藤 泰 (新任 昭53) 退任 中西茂
  - 白石章治 (留任 昭61)
- 幹事
- 代表幹事 藤本敏行 退任 佐藤活朗
  - 総務幹事 古田 茂 (留任)
  - 会計幹事 西牟田伸一 退任 田形祐樹
  - 会報幹事 佐藤 恭 (留任)
  - 井草長雄 (留任)
  - 大谷公重 (留任)
  - 山行幹事 丸山則二 (留任)

### 4 会員

- 近藤 泰 (留任)
- 学生幹事 井上裕之 (留任)
- 古瀬泰介 (留任)
- 保険幹事 岡部晃和 (留任)
- 監事
- 渡辺嘉佑 (留任)
- 中村雅明 (留任)
- 新入会員
- 宗像 充 (一橋大学大学院在学)
- 田中真之 (一橋大学大学院在学)
- 逝去会員
- 高野秀男 (昭19)  
平成11年10月16日病死
- 藤巻 悟 (昭48)  
平成11年11月23日事故死
- 柿原謙一 (昭12)  
平成12年1月16日病死
- 田中一雄 (昭23)  
平成12年2月18日病死
- 増山清太郎 (昭8)  
平成12年8月12日病死

## 針葉樹会平成11年度一般会計決算

(平成11年6月1日～平成12年5月31日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
会報発行費	193,200	300,000	前年度繰越	0	0
借入金返済	175,089	175,089	納入会費	715,000	775,000
山岳部補助	140,000	140,000	雑収入	754	2,000
通信連絡費	116,344	100,000	特別繰入(遭対策より)	0	148,805
総務諸経費	56,277	70,000			
学生保険補助	32,000	32,000			
名簿発行費	0	100,000			
次年度へ繰り越し	2,844	8,716			
合計	715,754	925,805		715,754	925,805

## 針葉樹会平成11年度部室整備基金決算

(平成11年6月1日～平成12年5月31日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
設備費	0	480,000	前年度繰越	0	0
雑費	0	20,000	遭難対策基金より	500,000	500,000
次年度へ繰り越し	500,000	0			
合計	500,000	500,000		500,000	500,000

## 針葉樹会平成11年度遭難対策基金決算

(平成11年6月1日～平成12年5月31日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
学生保険補助	32,000	32,000	前年度繰越	5,560,678	5,560,678
遭難対策費(北穂)	0	50,000	内遭難対策基金	4,660,678	4,660,678
一般会計補助	0	148,805	内遠征基金	900,000	900,000
部室整備基金へ	500,000	500,000			
次年度へ繰り越し	5,131,275	4,872,873	寄付金収入(坂井さん)	30,000	0
内遭難対策基金	4,231,275	3,972,873	同 (高野さん)	30,000	0
内遠征基金	900,000	900,000	一般会計より(学生保険補助)	32,000	32,000
合計	5,663,275	5,603,678	利息等	10,597	11,000
				5,663,275	5,603,678



左から大塚武、柿原、堀岡清、佐々木誠の各氏  
(昭和16年4月25日、小樽山にて)

訂正 前91号の3ページ、柿原謙一氏追悼記事中に  
入れた写真は、手違いで左右が逆転して印刷されて  
いました。お詫びして訂正いたします。

## 編集後記

▼今号も大先輩の追悼文をのせなければなりませんでした。増山さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。そして堀岡さんには前号に引続き追悼文をお願いすることになってしまいました。堀岡さんの文中にある増山さんとの思い出深い山行、昭和8年、十勝岳の同行者の「奥野綱重大先輩」は今回「マッターホルンスキー行」を書かれた奥野巖根さん(昭和31)の父上です。ご存じない若い会員も居られるかと思ひ、念の為。

▼前編集人中村保さんの路線と同じく、出来るだけ多くの方に投稿していただくよう心がけています。特に90年代の会報に一度も登場されていない方には個人的にアプローチを行い原稿をお願いしつつあります。すでに何人かの方々には当方の要望に快く応えていただきました。今後とも各位の積極的な参加を期待いたします。

▼前号で予告した加地さんの力作が米国、塩湖城(！)から届きました。「普段日本語を使わないので言葉が思い当らず

悪戦苦闘でした：しかし有意義な機会でした。」という手紙と個性的なスケッチ数枚が添えられていました。たっぷりのインクでの力強い筆跡の文章をパソコン入力する際、特に芭蕉のくだりは見慣れない漢字を探すのにこちらも少しばかり苦戦しました。哲学学究の徒であり、自然愛好者であり、且つ鉄人である彼の思考のレベル、スケール、そしてアメリカにいながらの東洋的なものへの造詣の深さに脱帽しました。

(佐薙)

増山先輩の写真をと宮川さんをお願いしたところ、1933年の卒業アルバムと、戦前の個人アルバムを如水会館まで持ってきていただき、佐薙さん、倉知さんと一緒に拝見しました。ただ残念なことに写真説明がまったくないので、誰が写っているのか、どこなのかさっぱりわかりませんでした。

(井)